

R. A. SAYCE 「1530 年-1800 年に印刷された本の植字慣行と印刷地の特定」 の検討 (3)

Verification of R. A. Sayce's "Compositorial Practices and the Localization
of Printed Books, 1530-1800" (3)

福島 知己

FUKUSHIMA Tomomi

一 R. A. SAYCE 「1530 年-1800 年に印刷された本の植字慣行と印刷 地の特定」 (3)

前号に引き続き、R. A. Sayce, "Compositorial Practices and the Localization of Printed Books, 1530-1800," *The Library*, fifth series, 21 (1), March 1966 の翻訳を以下に掲げる。今号では第 1 章第 3 節から第 2 章までを扱う。

(ここから翻訳)

3. 折記号の数字の記載の仕方

(i) ローマ数字とアラビア数字

一般に、折記号の数字としてローマ数字を用いる仕方は、16 世紀末頃まで多くの印刷地で採用されている。それ以降このやり方はフランスで印刷された本、とりわけ Paris で印刷された本の独特な特徴的流儀となる¹。

このやり方が Paris で印刷された本の顕著な特徴的流儀であるということは、小論が検討する時期がはじまるまでにすでに確立している。ざっと見ただけで 1512 年から 1523 年までのあいだに 8 例が認められる。調査対象期間における最初の使用例は 1531 年であり、最後の使用例は 1790 年である²。16・17 世紀を通じて、さらに 18 世紀の大部分についても、この慣行からの逸脱例は極端に少ない。ただし、16 世紀には、ギリシア語の本で折記号の数字にアラビア数字が使われているときがある（このことの最後の例は、Imprimerie Royale で 1642 年に印刷された新約聖書である）。疑わしい事例を除けば、1531 年から 1790 年までに折記号の数字を記載するためにローマ数字が使われている本の総数は 630 点であり、アラビア数字が使われている本の総数は 21 点である。ただし、他の点と同様、フランス革命が近づくにつれ標準的なパターンが崩れていき、Paris の印刷者も他の国々で採用されているもっと合理的な慣行に従うようになっていく。1767 年以降アラビア数字が使われる頻度が増していき、1780 年以降は事例の過半数になる。1790 年から 1799 年まで 17 冊の本で折記号にアラビア数字が使わ

¹ Cf. Barber, 'Catchwords,' p. 303. ただし以下で見るように、「オランダ、ドイツおよびスイスの慣行もフランスと同様であったようだ」とするのは正しくない。

² M.-J. de Chénier, *Charles IX*, Paris, Bossange, 1790 (印刷者は Didot である) (R.S.).

れているが、これはこの時期以外で調査した期間すべてに現れるのとはほぼ同数である（そして、この時期には、本文の折記号がローマ数字になっている例はない）。予想される通り、調査対象期間の終わりには混ぜて使われている例が多く、とりわけ前付部分の折記号にはローマ数字を使い、本文の折記号にはアラビア数字を使うといったどっちつかずの跡が見られる。1566年と1743年に散発的に使われている事例があるが、それ以外は1769年から1799年まで混合的に使われている例が見られる。そこで、概して言えば、折記号の数字にローマ数字を用いるのがParisで印刷された本の支配的な特徴であった時期は、1780年頃に終わると考えられる。

フランスの地方部の慣行は、もっと複雑である。まず、Parisのやり方にきっちり追随した都市を取り上げよう。Rouenで印刷された本では、ローマ数字を使うのが通常のやり方であった（1597年-1675年、1679年に近隣のQuevillyの例がある）。しかし、アラビア数字を使用した例も時折見つかってはいるし（1624年-49年）、両者を混ぜて使っている例もかなり多い（1583年-1664年）。ローマ数字が使われている例は他にも、Caen（1562年-1683年）、La Rochelle（1581年-1766年）、Saumur（1620年-74年、ただし1666年にアラビア数字を使っている例がある）、Troyes（1641年-1715年）がある。一度あるいは数度だけ使われた例があるものを一応挙げておくと、Poitiers（1550年、1560年（2冊））、Rheims（1582年）、Tours（1592年）、Rennes（1616年、1619年）、Maille（1616年、1619年）、Pont-à-Mousson（1622年）、Nancy（1627年）、La Flèche（1627年）、Orthez（1635年、1639年）、Saint-Malo（1650年）、Arles（1680年）、Trévoux（1702）、Saints-Menehould（1732年）、Nîmes（1769年）がある。

他方、Lyonsで印刷された本ではアラビア数字を好むという主要な伝統があり、早い例では1532年に現れ、17世紀後期に至るまで大多数の事例でアラビア数字が使われている。ローマ数字は1518年に印刷された1冊の本で用いられているが、16世紀に印刷された本では1545年以降ごくたまに用いられるにすぎない。しかし、1585年から1680年までは1例も見つからなかった。別の文脈でも見たように、1680年頃にLyonsの独立性が崩れ、その印刷慣行はしだいにパリのものに似通ってくる。1680年から1780年まで、多くの本の折記号の数字がローマ数字で記されている。両者がどちらも使われどっちつかずな例が1694年の刊本に見られる。ただし、18世紀になっても、アラビア数字は時折使われている。記録した例では1735年、1770年（前付部分ではローマ数字が用いられている）、1771年の例がある。

Lyonsの慣行に追随した都市は主にフランス南部であり、La Rochelle（1578年）、Tournon（1595年-1616年）、Orleans（1604年、1620年）、Niort（1616年）、Narbonne（1651年）、Trevoux（1689年）、そして最も数多く見つかったのがAvignon（1623年-1769年）である。さらに、Douai（1564年、1605年、1625年、1629年。また1623年に混ぜて使われている例がある）とCambrai（1613年）も加えておく。ただし、これらの都市はベルギーに属するとしたほうが適切であろう。

以下の都市ではどちらのやり方も見つかっている。Saint-Omer（アラビア数字 1614年、ローマ数字 1723年）、Aix（前付部分の折記号ではアラビア数字で本文折記号はローマ数字の例が1587年）、Évreux（混ざっている例 1726年）、Bordeaux（ローマ数字の使用例は1576年-1686年、アラビア数字の使用例は1574年-95年および1768年。混ざっている例が1593年、1594年、1601年）。一般的な発展がもっともよく例示されている事例は、Toulouseで印刷された本に見られる（アラビア数字が1612年-60年と1784年-86年に使われ、ローマ数字が

1712年-84年に使われている)。Lyonsで印刷された本に見られたのと同じく、17世紀にはアラビア数字が使われているが、18世紀にはローマ数字が使われている。そして、調査対象期間の終わる時期に再びアラビア数字が戻ってきて、Parisの印刷者たちがアラビア数字を採用し始めるのである。

フランスと国境を接するベルギーとスイスで印刷された本は、特別な注意が必要である。ベルギーで印刷された本では、16世紀中葉以降、アラビア数字が使われることが多い。Antwerpで印刷された本ではローマ数字は1525年から1564年まで見つかり（散発的には1656年にも）、アラビア数字は1537年から1788年まで見つかる（大多数）。Brusselsで印刷された本では1658年から1770年まではアラビア数字が使われており、ローマ数字が使われているのはわずか1例（1702年）、両方混ざっているのも1例（1788年）であった。Louvainで印刷された本ではローマ数字が使われている例が1550年に見つかるが、アラビア数字の使用例が1566年から1705年におよぶ。混ぜて使われている例が1549年から1659年まで見つっている。Liègeで印刷されている本ではアラビア数字だけが使われているが（1630年-1787年）、1777年に印刷されたある本で、前付部分の折記号の記載にローマ数字が使われている。他の都市でアラビア数字だけを使って折記号の数字が表示されているのは、Ghent, Luxemburg, Bouillonを数えるにすぎない。

スイスで印刷された本では、GenevaとBasleの間で非常にくっきりとした違いがある。Genevaでは調査対象期間を通じてどちらのやり方もよく使われているが（ローマ数字 1546年-1780年、アラビア数字 1540年-1780年）、ローマ数字の使用例が明白に多い。これは、フランスの影響を受けやすいということから考えて、予想される通りであろう。混ぜて使われている例がとりわけ多く（1552年-1782年）、一般に、この特徴的流儀はフランスの地方都市または近隣諸国で印刷されたものだという証拠となりうる。Lausanneで印刷された本（アラビア数字 1691年-1756年、ローマ数字 1747年、1770年）とNeuchâtelで印刷された本（ローマ数字 1535年、1777年-83年、アラビア数字 1744年-87年）でも、両方のやり方が見つっている。他方、Basleで印刷された本では、調査した中の最も古い本から、アラビア数字が完全に支配的である（1533年-1679年）。ローマ数字の使用例は1例のみ（1570年）、また前付部分の折記号にローマ数字を使う例が2例（1569年、1797年）見つっている。Zurichで印刷された本では、Basleに倣って、アラビア数字のみが使われている（1556年-1670年）。

他の国々では、ほぼ全域でアラビア数字が使われているので、同様に詳しく紹介する必要はない。ただし、ローマ数字が使われなくなった年代を示し、それ以降の数少ない例外事例の重要性を評価しておくべきであろう。イタリアで印刷された本では、アラビア数字を使うやり方が、16世紀後半にしっかり確立された（Venice 1516年、1554年、1558年、Parma 1552年、Florence 1564年、Rome 1570年）³。Veniceで印刷された本では、1550年から1580年までローマ数字がかなり一般的で（混ぜて使われている例が1576年にある）、16世紀に印刷された本のうち最後の例はCasalmaggiore（1581年）であった。これ以降は、1796年のNaplesで印刷された本の例まで、アラビア数字だけが見つっている。例外は、Romeで1705年と1706年に印刷された2冊の本と、Veniceで1729年に印刷された2冊の本である。

ドイツで印刷された本でもアラビア数字が早くから使われており（Mainz 1530年、

³ Haeblerによれば、イタリアで印刷された本にはインキュナブラからすでにアラビア数字が用いられているという特徴がある（*Handbuch der Inkunabelkunde*, Leipzig, 1925, p. 55）。

Tübingen 1533 年 (2 冊), Wittenberg 1534 年), 調査対象期間の最後 (Gera 1798 年) までそのまま続いている。ただし、ローマ数字が使われた期間が、イタリアで印刷された本におけるよりかなり長い。Frankfurt で印刷された本では 1637 年まで、Leipzig で印刷された本では 1691 年まで見つかった。18 世紀に印刷された本でも 3 例 (Leipzig 1756 年, Berlin 1756 年, Dresden 1771 年) がある。Hamburg で 1798 年に印刷された本では、前付部分にローマ数字が使われている。予想通り、Strasbourg の印刷者は一貫してアラビア数字を用いており (1539 年-1775 年)、ローマ数字の使用例は 3 例 (1540 年, 1565 年, 1570 年) 見つかるにすぎない。

オランダで印刷された本のパターンも同様である。1586 年 (Leiden, Franeker) から 1799 年 (Leiden and Amsterdam) まで、圧倒的多数の事例で、折記号の番号表示にアラビア数字が使われている。Leiden で 16 世紀後期から 17 世紀の最初期 (1575 年-1613 年) までに印刷された本では、ローマ数字を使う傾向がある。混ぜて使われている例が 1615 年と 1618 年にある。他の都市でも同時にローマ数字が、とりわけゴシック書体で印刷された本に使われている (Amsterdam 1582 年-1626 年, Haarlem 1599 年, 1616 年, Gouda 1590, Arnhem 1605 年, この例では前付部分ではアラビア数字が使われている)。これ以降は散発的に、1683 年 (Amsterdam) から 1779 年 (Maastricht) まで使われている例がある。この散発的な例の中には、出版事項にフランス系の印刷者ないし出版業者が記載されているものがあり、疑わしい事例はない。ただし、調査対象期間の終わりが近づくころに Amsterdam で印刷された本に、両方の記し方を混ぜて使われている例が数多く見つかる (1751 年-81 年)。

ブリテン諸島では、1600 年以降、ほぼ例外なく折記号の数字にアラビア数字が用いられている。London で印刷された本で使われている例は、1566 年から 1799 年に至る。16 世紀にはローマ数字が一般的である (London 1534 年-1603 年, Edinburgh 1582 年, Oxford 1585 年)。1587 年に Oxford で印刷された本では前付部分の折記号の数字にローマ数字が使われており、1598 年に印刷された本でアラビア数字とローマ数字が混在しているものが 1 例ある。1603 年以降では前述の 1725 年に印刷された Boccaccio の本を数えるのみである。Cambridge, Glasgow, Dublin で印刷された本では折記号の数字にローマ数字が用いられている例は見つからなかったが、ただし Cambridge で印刷された本 1 点 (1591 年) で前付部分の折記号にローマ数字が用いられている。

スペインとポルトガルで印刷された本では、アラビア数字だけが使われている (Alcala 1580 年-Barcelona 1796 年)。もっと時代を遡ると、3 点の例外がある (Barcelona 1543 年, Saragossa 1555 年, Coimbra 1564 年)。北欧の本は調査件数が少ないが、すべてアラビア数字が使われている (Copenhagen 1631 年-Stockholm 1786 年)。

以上から次のことがわかる。1630 年頃から 1780 年頃までに印刷された本で折記号の数字にローマ数字が使われていればフランスで印刷された本、とりわけ Paris で印刷された本、あるいは場合によってはフランス語圏スイスで印刷された本であると強く推測できる。逆にアラビア数字が使用されていれば、Paris で印刷された本ではないと強く推測される (ただしフランスで印刷された本でないとはまだはいえない)。おなじ時期に両者が混在して用いられていれば、Geneva ないしフランス地方都市あるいはベルギーないしスイスで印刷されたものと推測できるかもしれない。ただし、この点では、他で印刷された例も見ついている。1580 年頃以降にイタリアで印刷された本では、折記号の数字にローマ数字が用いられることはなさそうである。

(ii) ii と ij

折記号の数字を記すのにローマ数字を用いる初期の印刷本は、ふつう、ii, iii等々のように記している。16世紀には、これがij, iij等々のように変わった。Parisで印刷された本ではすでに1530年までにijと記するのが一般的になっているが、1540年代までiiと記された例もあるし、iiと記された最も遅い例は1581年と記録されている。「Paris」で印刷されたと名乗る1611年のある本も、おなじくiiと記しているが、これはどうやらRouenで印刷されたようである。iiを使用している遅い時期の例はLyons (1561年) およびCaen (1562年) があるが、Lyonsではもっと早くijが使われ始めている (1518年-50年)。イタリアで印刷された本についても同様のことが言える。iiが使われている最も遅い例はFlorence (1552年), Pescia (1555年), Venice (1556年、これは1530年以後では唯一のVeniceの例である) に見つかる。ドイツで印刷された本でiiが使われている例は、Vienna (1570年) を数えるのみであった。Antwerpではもっと早く変化が起こったようである。iiが用いられている最後の例は1528年であり、ijが用いられている最初の例は1530年である。スペインとオランダで印刷された本では、調査したうちの最も古い例 (Barcelona 1543年, Leiden 1555年) からijが規則的に使われている一方、iiが使われているのはLeidenで1615年に印刷されたアラビア語で書かれた本1点のみであった⁴。ブリテンで印刷された本では、ijは早くも1534年に現れており、iiが使われている最後の例は1582年であった (いずれもLondonで印刷されたもの)。ただし1585年にOxfordで印刷された本では両者が混在しており、前述のように1725年に印刷されたBoccaccioの本でiiが使われている。いずれにせよ、最も著しい点は、Genevaではiiが他で使用されなくなった後も依然として用いられていたということである。これもGenevaの印刷術の擬古趣味の好例といえよう。Genevaでは1560年代を通じてiiが一般的であり、ijが使われた最初の例は1563年になってから現れるにすぎない。1580年と1581年には両者が混在している例があり、1628年に印刷された本でもiiが使われた例が1例見つかっている。

この特徴的流儀を検討する一番の価値は、標題紙に記された刊行年が疑わしい事例において、折記号の数字にiiが使用されているならば刊行年がかなり古いと推測できるということである。1580年頃に印刷されiiが用いられている本ならおそらくGenevaで印刷されたものであるといえそうである。

(iii) iij および iv

Parisで印刷された本では、18世紀中葉まで、折記号に用いられる4の数字が一貫してiijと記されている。18世紀中葉を過ぎると、ivが使われるようになる。ivが用いられている最も古い例は1750年の刊本であり、iijが用いられている最も遅い例は1761年の刊本である。従って、Parisに関するかぎり、両者が移り変わった時期はある程度正確に示せることになる。1750年以前にivが使われることはあまりなく、1760年以降にiijが使われることも少ない。ただし、Paris以外では、単発的にivが使われた例がある。その多くは残念ながら印刷地がはっきりしない。Brussels (またはRouen?) 1699年, 1700年, Brussels 1702年, Saints-Menchould 1732年, Lausanne and Geneva 1747年。1760年以降では以下の場所 で用いられている。Lyons (1768年), Geneva, Avignon (1769年), Dresden (1771年), Amsterdam (1775年), Neuchâtel (1777年), Maastricht (1779年), Hamburg (1798年)。

⁴ Locman, *Fabulae*, Leidae, In *Typographia Erpeniana*, 1615 (W.: HH.7.1).

本項目でいくつか風変わりなやり方も紹介しておく。jv (Lausanne 1770 年), iiiij (Leipzig 1655 年), iiiij (Paris 1583 年)。

(iv) 第1紙葉に番号をつけるやり方 Aj

折丁の第1紙葉にAiないしAjと番号づけがされるやり方は、16世紀および(数少ないが)17世紀に限られる。Parisで印刷された本では、1520年から1610年まで見つかる。Bordeauxで1576年に印刷された本と、Lyonsで1594年に印刷された本にも見つかった。ブリテンの例が多い(London 1548年-99年, Edinburgh 1582年, Oxford 1585年, 1598年, Cambridge 1591年, 1610年)。時代は下るが、Leipzigで1655年に印刷された本にも見つかった。とはいえ、これがはるかに頻繁に見られるのは、Genevaで印刷された本である。最初の例は1553年に見られ、17世紀まで広く用いられ、最後の例は1642年に見られる。Leipzigの例のほうが遅いとはいえ、ここでもまたGenevaの印刷術の擬古趣味の実例が見いだされるようであり、17世紀の本がGenevaで印刷されたかどうかを調べる手がかりとなりそうである。

(v) 数字を上付き文字にするやり方 A²

このやり方が見つかったのは1冊だけであった(Paris 1793年)⁵。

4. ピリオド A.ij.

16世紀および17世紀のごく初頭の数点の本では、A.ii (ij) またはA.ii. (ij.) といったように、折記号に一つないし二つのピリオドが用いられている。ピリオドが2回使われていることのほうが多い。この慣行はローマ数字を使うときに適用されることがはるかに多いようである。一番よく用いられているのはGeneva (1551年-1610年) だが、Parisの本 (1532年-1610年) でもよく見受けられるし、Lyons (1561年, 1574年), Bordeaux (1576年), Antwerp (1525年-34年), Louvain (1550年), Vienna (1570年), Frankfurt (1600年), London (1534年-98年), Oxford (1585年), Cambridge (1591年), Edinburgh (1582年), Leiden (1610年) でも例がある。一番時代の下る例はすべて1610年のもので、Paris, Leiden, Geneva (2点) であった。この特徴的流儀からなんらかの結論が導けるかはっきりしないが、Genevaで広く用いられていたことは特記してよいだろう。Oxfordで1598年に印刷された本1点には、Ajとも記されている。

5. 行のどこに折記号を配置するか

すべてのページにキャッチワードが記された本では、自然に、折記号が中央ないしその付近に配置される傾向がある⁶。それ以外の場合には右側に配置する傾向がある。ざっと見た限りでは、このような区別に大きな意味は見いだせなかった。ただし、18世紀後期に印刷されたオランダとドイツの本3点(Leiden 1779年2点, Breslau 1789年)では、すべてのページにキャッチワードがあるわけではないのに、折記号が中央に配置されている。もっと徹底的な調査によってこの慣行が確認されれば、前述のような明瞭な伝統的区別では手に負えない場合で

⁵ Dusaulx, *De mes rapports avec J.-J. Rousseau*, Paris, Didot, 1798 (R.A.L.)

⁶ Cf. Moxon: 「植字工は折記号を行の中央付近に配置する。あるいは中央よりも若干後ろに配置する」(*Mechanick exercises*, ed. Davis and Carter, London, 1962, p. 210)。

も、同定の役に立つ証拠となるかもしれない。

6. 折記号が記されている紙葉の数

これが印刷地を探るうえで最も役に立つ指標の一つである。最も複雑な指標の一つでもあるので、ここではごく単純な説明を試みるにとどめる。2折判(folio)についてはあまり特別な問題がないので省略する(ただし、2折判が他の判型と同様の傾向を示すときがある)。以下では4折判、8折判、12折判のみを論じる。ここでの目的に鑑みると、8葉からなる4折判(quarto in eights)は一般に8折判として扱ってよく、4葉からなる8折判(octavo in fours)は4折判扱いしてよい。独断的な(かならずしも統計的でない)規範として、ひとつの折丁の紙葉の半分まで折記号が記されていると想定している⁷。全般的に、これよりも多くの紙葉に折記号を記すのはオランダとドイツで印刷された本の特徴であり、〔折丁の紙葉の半分まで折記号を記すという〕規範に忠実に従うのがイタリア、スペイン、そして後述する例外こそあるもののイングランドで印刷された本の特徴である。折記号が記されている紙葉の割合が尋常でなく多ければ、遠隔地ないし地方都市で印刷されたものである可能性がある。いくつかの12折判の事例を除けば、折記号を記している紙葉が半分以下なのは18世紀後期の趨勢である。

Parisのやり方は単純である。各折丁の半分の紙葉に折記号が記されている。ただし4折判では、18世紀半ばまで(一番時代が下る例では1770年)、1葉目から3葉目までに折記号が記されている。1724年、1745年、および1766年から1799年までは4折判の1葉目から2葉目までに折記号が記されている。ここでもまたアンシアン・レジーム末期のParisの慣行の変化が見てとれる。さらにまた8+4の12折判の事例でも小さな変化が生じている(8葉と4葉を組み合わせるのはParisの本ではたいへんよく見られるやり方だが、他の地域では比較的少ない。したがって、このような構成になっていること自体、フランスで印刷されたものという傍証になるかもしれない⁸)。最初の折丁が1葉目から4葉目まで折記号が記されるのは変わらないが、2番目の折丁は1680年頃までは1葉目から3葉目まで、それ以降は1葉目から2葉目まで折記号が記されるようになる(年代を精確に示せば、1葉目から4葉目まで折記号が示されている例が1579年、1582年に印刷された本に見られ、1葉目から3葉目まで折記号が記されている例が1579年から1724年までに印刷された本に、1葉目から2葉目まで折記号が記されている例が1668年から1771年まで印刷された本に見られる)。主だったやり方が採用されていた期間を以下に要約しておく。各折丁の1葉目から3葉目まで折記号が記された4折判：1551年-1770年。1葉目から2葉目まで折記号が記された4折判：1766年-1799年。1葉目から4葉目まで折記号が記された8折判：1512年-1798年。1葉目から6葉目まで折記号が記された12折判：1584年-1799年。この図式にあてはまらない例はごくわずかにすぎない。1766年以前の印刷で1葉目から2葉目に折記号が記された4折判が少数あるが(1634年-1745年)、ほとんどは小冊子である。1葉目から5葉目まで折記号が記された8折判は1例のみで、他の点でも一風変わっている(1743年)⁹。1葉目から7葉目まで折記号が記された12折判は2例あ

⁷ Cf. W. Blades, *The use and development of signatures in books* (Bibliographical Miscellanies. No. 1), London, 1890, p. 24.; McKerrow, *Introduction*, pp. 79-80.

⁸ ただし Buchanan, *Psalmorum Davidis paraphrasis*, Argentorati, I. Rihelius, 1566 が 8+4 の 12 折判である (I. D. McFarlane, *Forum*, vii (1971), 329 を参照)。

⁹ J. A. Fabricius, *Theologie de l'eau*, Paris, Chaubert, Durand, 1743 (R.S.).

るが、どれも風変わりな本である（1583年、1583年¹⁰）。

フランスの地方都市に話を移せば、Lyonsで印刷された本は4折判と12折判については、Parisのやり方と同様である（4折判では各折丁の1葉目から3葉目まで折記号を記す1552年-1703年。12折判では各折丁の1葉目から6葉目まで折記号を記す1599年-1780年）が、8折判のあつかいでは独自性を発揮している。Lyons印刷業の最盛期（1533年-1653年）には、8折判は通常各折丁の1葉目から5葉目まで折記号が記されている。1653年以前に印刷された本では時折、そしてそれ以降に印刷された本では頻繁に、1葉目から4葉目まで折記号が記されるのを見るようになる（1574年-1771年）。12折判では各折丁の1葉目から7葉目まで折記号が記されている本が2例あり（1595年、1599年）、1葉目から5葉目まで記されている本が1672年から1694年までに数例見つかった。Rouenで印刷された本では、ある限られた時期（1597年-1616年）の本では1葉目から5葉目まで折記号が記されるのが頻繁に見受けられるが、それ以降は1葉目から6葉目まで記されるようになる。8折判はParisの慣行と同様である。ほかの都市で印刷された本は概してParisと同様であるが、Tournonで印刷された8折判では1葉目から5葉目まで折記号が記されており（1604年-16年）、1葉目から5葉目まで折記号が記された12折判（1595年）も1例見つかった。後者の例は、Bordeaux（1599年）、Cambrai（1613年）、Niort（1616年）でも見つかった。各折丁の1葉目から5葉目まで折記号が記された8折判は、Bordeaux（1580年、1582年）とTrévoux（1702年）で印刷された本のなかにも見つかった。Bordeauxで印刷された本のなかには、8折判だが1葉目から3葉目までしか折記号を記さないというかなり珍しい例が3例あった（1594年、1686年、1768年）。このやり方はMaillé（1619年）とTroyes（1641年）で印刷された本でも見つかった。4折判の各折丁の1葉目から2葉目まで折記号を示すやり方は、1750年以前では、Parisで印刷された本より地方都市で印刷された本によく見受けられる（Bordeaux 1574年、1587年、Orthez 1635年、1639年、Saint-Malo 1650、Narbonne 1651年、Rouen 1658年、Saumur 1674年、Saint-Omer 1723年）。

ベルギーとスイスで印刷された本は、ここでもまた、一筋縄に行かない。Antwerpで印刷された本は、当然ながらオランダのやり方に近く、4折判では1葉目から3葉目まで（1531年-1665年）、8折判では1葉目から5葉目まで（1528年-1788年）、12折判では1葉目から7葉目まで（1591年、1631年）折記号が記されている。例外的に、初期に印刷された8折判数点で1葉目から4葉目まで折記号が記されており（1525年-70年）、4葉からなる8折判1点で1葉目から2葉目まで折記号が記されていた（1656年）。ほかの諸都市で印刷された本はさまざまなやり方が入り混じっており、それ自体としては意義深いにせよ、なら堅牢な結論を引き出せるものではない。Louvain（1葉目から2葉目まで折記号が記された4折判1549年、1葉目から5葉目まで折記号が記された8折判1566年、1葉目から5葉目まで折記号が記された12折判1705年）、Ghent（1葉目から3葉目まで折記号が記された4折判1617年、同一書中折丁によって1葉目から6葉目までまたは1葉目から7葉目までに折記号が記された12折判1625年）、Brussels（1葉目から3葉目まで折記号が記された4折判1660年-1700年、1葉目から2葉目まで折記号が記された4折判1770年、1葉目から6葉目まで折記号が記された12折判1658年-1701年、1葉目から7葉目まで折記号が記された12折判1676年、1731年）、

¹⁰ Hierocles, *Commentarius in aurea Pythagoreorum carmina*, Parisiis, S. Preuosteau, 1583 (W.: YC.5.13).

Liège (1葉目から5葉目まで折記号が記されている8折判1630年, 1葉目から4葉目まで折記号が記されている8折判1777年, 1787年, 1葉目から7葉目まで折記号が記されている12折判1667年, 1葉目から6葉目まで折記号が記されている12折判1698年), Luxemburg (1葉目から4葉目まで折記号が記されている8折判1702年), Bouillon (1葉目から4葉目まで折記号が記されている8折判1770年)。スイスで印刷された本は, いつも通り, フランス語圏とドイツ語圏で分かれる。Genevaで印刷された4折判では各折丁の1葉目から3葉目まで折記号が記されており(1580年-1716年), 8折判では1葉目から4葉目まで記されている(1551年-1782年)。ただし, もっと時代を遡ると, 1葉目から5葉目まで折記号を記すやり方も広く見られる(1540年-1630年)。12折判では1葉目から6葉目まで折記号が記されているが(1609年-1769年), 1葉目から7葉目まで記された例も1例見つかっている(1738年)。18世紀(1691年-1796年)にLausanneとNeuchâtelで印刷された本でも, 同様に, 8折判では1葉目から4葉目まで, 12折判では1葉目から6葉目まで折記号が記されている。Basleで印刷された本でも, 4折判では1葉目から3葉目まで折記号が記されているが(1533年-1679年), 8折判では1葉目から5葉目まで折記号が記されている(1534年-1641年)。ただし, 8折判でも, 18世紀後期のドイツに特徴的な慣行である1葉目から4葉目まで折記号が記すやり方が採用された例が, 1例見つかっている(1797年)。Zurichで印刷された本はわずかしかなかったわけではないが(1561年-1670年), Basleで印刷された本と同様であった。

オランダで印刷された4折判では各折丁の1葉目から3葉目まで折記号が記されており(Leiden 1594年-1768年), 8折判では1葉目から5葉目まで折記号が記されている(Leiden 1586年, Franeker 1586年からLeiden and Amsterdam 1799年まで)。4折判の場合, 例外は無視できるほどしかない。Amsterdamで1724年と1751年に印刷された計2冊の本では各折丁の1葉目から2葉目まで折記号が記されているが, どちらもほんとうにそこで印刷されたか疑わしい。1葉目から4葉目まで折記号が記された8折判はほんの数例しかなく(Leiden 1575年-1784年, Amsterdam 1686年-1775年, Maastricht 1731年, The Hague 1776年), 1葉目から3葉目まで折記号が記されている8折判は, 1例のみである(Amsterdam 1785年)。12折判は多様である。独特の慣行は1葉目から7葉目まで折記号を記すことであり(Amsterdam 1640年-1796年), とりわけAmsterdam, The Hague, Rotterdamで広く見られ, オランダで製作された偽版のしるしであることが多い。他方で1葉目から6葉目まで折記号を記すやり方も広く見られる(Leiden 1617年-Amsterdam 1775年)。1葉目から5葉目まで折記号を記すのはLeidenのElzevierで印刷された本に用いられていることがよく知られている慣行であり¹¹, 調査対象中では1636年から1659年に印刷された本に見られた。1葉目から5葉目まで折記号を記されている例は, Amsterdam (1617年, 1652年) およびUtrecht (1698年) で印刷された本にも見つかっている。

ドイツの慣行もほとんど同じである。4折判では各折丁の1葉目から3葉目まで折記号が記されており(Nuremberg 1546年-Göttingen 1769年), 8折判では各折丁の1葉目から5葉目まで折記号が記されている(Mainz 1530年-Leipzig 1797年)。4折判で1葉目から2葉目までのみ折記号が記されている例は1例しか見つからなかった(Leipzig 1756年)。8折判では1葉目から4葉目まで折記号が記されている例が16世紀の終わりから17世紀初頭にかけて時折見つかっており(Frankfurt 1576年-1607年, Hanau 1602年-10年), 18世紀末に近づいてい

¹¹ A. Willems, *Les Elzevier*, Brussels, 1880, p. 456.

くと再び見つかる (Dresden 1756 年, Strasbourg 1762 年, Zwei-brücken 1776 年, Hamburg 1798 年, Gera 1798 年)。12 折判では 1 葉目から 6 葉目まで折記号が記されるか (Frankfurt 1716 年, Leipzig 1758 年), もっと広く見られるやり方では, 1 葉目から 7 葉目まで折記号が記される (Herborn 1613 年-Berlin 1755 年)。

北欧の例はここでも少なすぎて有益な結論を出せるわけではないが, 調べた限りでは, オランダないしドイツのパターンに近い。4 折判では 1 葉目から 3 葉目まで折記号が記される (Copenhagen 1631 年-Stockhohn 1786 年), 8 折判では 1 葉目から 5 葉目まで折記号が記される (Uppsala 1697 年)。12 折判では 1 葉目から 6 葉目まで記されている (Stockholm 1649 年, 1652 年)。Stockholm (1656 年) は 8 折判にもかかわらず各折丁の 1 葉目から 6 葉目まで折記号が記されている。私が折記号を尋常でなく多く記していると述べた 1 例である。

イタリアに目を転じると, かなり様子が異なる。どの判型であっても, ひとつの折丁の紙葉の半分まで折記号が記されている。すなわち, 4 折判では 1 葉目から 2 葉目まで (Bologna 1523 年-Parma 1795 年), 8 折判では 1 葉目から 4 葉目まで (Naples 1504 年-1796 年), 12 折判では 1 葉目から 6 葉目まで (Parma 1552 年-Turin 1772 年) である。全期間を通じて, 例外が見つかったのは 2 点のみであった (Siena 1572 年では 4 折判の各折丁の 1 葉目から 3 葉目まで折記号が記され, Rome 1570 年では 12 折判の各折丁の 1 葉目から 7 葉目まで折記号が記されていた)。Venice で印刷された本では, 例外はまったく見られなかった。調査対象の代表性が適切であれば, スペインの本もおなじやり方を採用している。4 折判では 1 葉目から 2 葉目まで (Madrid 1638 年-Barcelona 1796 年), 8 折判では 1 葉目から 4 葉目まで折記号が記されている (Barcelona 1543 年-Madrid 1787 年)。例外は各折丁の 1 葉目から 3 葉目まで折記号が記された 4 折判 2 点 (Lisbon 1581 年, Toledo 1599 年), 1 葉目から 5 葉目まで折記号が記された 8 折判 3 点 (Madrid 1591 年, Cuenca 1596 年, Valencia 1628 年), 1 葉目から 7 葉目まで折記号が記された 12 折判 2 点 (Barcelona 1592 年, Tarragona 1593 年) である。

イングランドで印刷された本の一般的特徴はオランダのパターンに近いが, この点についてはイタリアとスペインのパターンにはるかに近い。4 折判は当初は 1 葉目から 3 葉目まで折記号が記されている (London 1544 年-1665 年, 下って 1733 年にも一例。Oxford 1588 年-1685 年, Cambridge 1699 年-1702 年)。しかし 17 世紀が進むに従って, 各折丁の 1 葉目から 2 葉目にだけ折記号を記すやり方に変わっていく¹²。たとえば London (1656 年-1798 年), Oxford (1677 年-1758 年), Cambridge (1691 年-1741 年), また Dublin (1710 年), Glasgow (1748 年-63 年), Edinburgh (1751 年-74 年) の例がある。同様に, 8 折判では 1 葉目から 4 葉目まで折記号が記されるが (London 1560 年-1799 年, Cambridge 1591 年-1749 年, Oxford 1585 年-1718 年), 16 世紀に London で印刷された本では各折丁の 1 葉目から 5 葉目までに折記号を記すやり方が広く見られる (1534 年-1607 年)。この時期以降では 1 葉目から 5 葉目までと 1 葉目から 4 葉目までの混合 (London 1614 年, Oxford 1637 年, 1658 年) と, 1 葉目から 5 葉目まで折記号が記され London で印刷されたことになっているが疑わしい本 1 点 (1760 年)¹³ と, 1 葉目から 3 葉目まで折記号が記された Oxford で印刷された本 1 点 (1715 年) を数える

¹² この点はすでに Moxon によって根拠を示さず指摘されている。「なぜなら植字工が 4 折判では 4 葉目の折記号をつけ忘れているだけではなく 3 葉目の折記号もめったにつけていないからである」(Mechanick exercises, p. 211)。18 世紀については R. W. Chapman, 'Notes on eighteenth-century bookbuilding', *The Library*, IV, iv (1923-4), 169 を参照。

¹³ Radicati, *Recueil de pieces curieuses*, Londres, S. Van Bergh, 1760.

のみである。12折判は1葉目から6葉目まで折記号が記されていることもあるが（London 1724年-78年）、もっと多いのは1葉目から5葉目まで折記号を記すやり方であって、18世紀まで引き継がれている。London（1581年-1766年）、Oxford（1585年-1694年）、Edinburgh（1615年）、Dublin（1753年）の例が見つかっている。

ひとつの折丁のすべての紙葉に折記号が記されている事例は少ないので、まとめて論じよう（もちろん2折判等の2枚の紙葉からなる折丁で構成されている本を除く）。4折判の各折丁の4枚の紙葉すべてに折記号が記されている例がParis（1548年、1588年）、Frankfurt（1581年）、Oxford（1590年）、London（1599年）、The Hague（1599年、1708年）、Orleans（1604年）、Le Désert（=Maillé）（1616年）、Leiden（1738年）で見つかっている。この慣行が用いられるのはおそらく特別な事情があり（たとえば図版ページがあるなど）、通常はそこから一般的推断を下すことはできない（OrleansとLe Désertの事例は、折記号を多めに記すという地方都市で見られる慣行に従っていると考えられる）。

また、18世紀後期には、折丁の半分の紙葉まで折記号が記されていない例は国別に検討するには数少なく、一般的趨勢とみなせるようであるから、ひとまとめに扱ってよい。8折判だが各折丁の1葉目から2葉目までしか折記号が記されていない例は数点（Troyes 1715年、Barcelona 1738年、Seville 1779年、Graz 1797年、Prague 1797年、Paris 1797年-8年）、12折判だが折記号は1葉目から2葉目までしか記されていない例は1点（Dublin 1792年）見つかった。もちろん、このやり方が行きつくところまでいけば、折記号の数字がすっかり省略され、各折丁の一枚目の紙葉にアルファベットだけが記されるという仕方になる。つまり、19・20世紀によく用いられるようになる慣行（数字よりもアルファベットを用いていた時期の）であるが、すでに18世紀にこのやり方が試されている（ここでもまた2折判では用いられていない）。初期の例はParis（1759年、1764年——Fournierの*Manuel typographique*の第1巻、1781年）で見られ、ついでLondon（1774年）、下ってドイツの例（Leipzig 1783年、1796年、Meissen 1788年、Bonn 1792年）がみつかる。

これらの観察から引き出せる積極的な証拠は、主に、12折判にかかわるものである。1640年頃以降の印刷で、1葉目から7葉目まで折記号が記されている12折判なら、オランダのものであることが多いが、ドイツのものである場合もある。17世紀中葉頃の印刷で、1葉目から5葉目まで折記号が記されていれば、LeidenのElzevierで印刷されたものかもしれない。やや時代を下ると、同様に1葉目から5葉目まで折記号が記されていても、Lyonsで印刷されたものかもしれない。18世紀の印刷であれば、おそらくイングランドで印刷されたものである（もう少し時代を遡ることもできる）。他の判型から言えるのは、おおむね消極的な証拠である。1葉目から2葉目まで折記号が記されている4折判が1760年以前にParisで印刷されたことは少なく、オランダまたはドイツで印刷されたことはいつの時期でもほとんどない。1葉目から3葉目まで折記号が記されている4折判が1700年以降イギリスで印刷されたことは少なく、イタリアとスペインで印刷されたことはほとんどない。1葉目から5葉目まで折記号が記されている8折判がParisで印刷されたことはたいへん少なく（また1700年以降にフランスで印刷されたことはまったくなく）、どの時期のイタリアで印刷されたことも、1630年以降のスペインで印刷されたことも、1610年以降にイギリスで印刷されたこともたいへん少ない。1葉目から4葉目まで折記号が記されている8折判がいつの時期であれオランダで印刷されたことはかなり少なく、1610年から1750年までのドイツで印刷されたこともかなり少ない。

II. キャッチワード

主な可能性は、(i)すべてのページにキャッチワードを記す、(ii)折記号のあるページを除くすべてのページに記す、(iii)すべての紙葉の裏ページに記す、(iv)各折丁の最終紙葉の裏ページのみに記す、(v)キャッチワードをいっさい記さない、のいずれかである¹⁴。簡潔のために、またドイツ語の *Blattkustoden* と *Lagekustoden* との類推で、(i)をページ・キャッチワード、(ii)を紙葉キャッチワード、(iv)を折丁キャッチワードと呼ぶことにしたい。一般に、折丁キャッチワードは、1550年頃からParisおよびParisの影響下にある地域で印刷された本に特徴的である。ページ・キャッチワードは、それ以外のすべての地域で、いずれにせよ18世紀後期まで印刷された本で使われている。紙葉キャッチワードは主に、Geneva以外で16世紀および17世紀前期に印刷された本に限られる。

(i) ページ・キャッチワード

調査対象中で最も古い例はBasle (1521年)であり、ついでAntwerp (1525年)である。最も古いドイツの例はMainz (1530年)であり、16世紀には他にも数々の例(Wittenberg 1534年-Frankfurt 1597年)が見つかった。17・18世紀に印刷された本ではページ・キャッチワードが使われているものが事例の大半を占めており、一番遅いものでGera (1798年)が見つかっている。イタリアで印刷された本では、16世紀中葉頃から、ほとんどの本でもこの慣行が採用されている。最も古い例はParma (1552年)であり、最も遅い例はNaples (1796年)である。Veniceで印刷された本では、1554年から1788年までの刊本に見つかっている。初期の例としては、他にも、Palermo (1558年)、Florence (1564年)、Rome (1570年)の例がある。オランダで印刷された本でも、このやり方が、少なくとも18世紀後期まで標準的な慣行である(もちろん確実とはいえないにせよ、頻繁に、一見するとフランスの本のように見えるが実はオランダで印刷された本であるというしるしになる)。最も古い例(1575年)はLeidenで印刷された本に見られ、最も遅い例(1799年)はLeidenとAmsterdamで印刷された本に見られる。ブリテンでもほぼ同様であり、Londonで印刷された本の例が1534年から1799年までの刊本に見つかっている¹⁵。スペインとポルトガル(Saragossa 1555年-Barcelona 1796年)および北欧(Copenhagen 1631年-Stockholm 1786年)で印刷された本では、スペインで初期に印刷された本(Barcelona 1543年)に例外的に1冊見つかった他は、異なるやり方がされている本はなかった。

フランスおよびフランスと国境を接する各国で印刷された本は、特別に注意して扱う必要がある。Parisで印刷された本の例が極端に少ないのは、予想通りである。1531年から1761年までに印刷された本が16点あるのみであり、そのうちには明らかに印刷地が偽られているようであるものもいくつかある。すなわち、Rheimsで印刷された本が1例(1582年)、Rouenで印刷された本が1例(1667年)¹⁶、Douaiで印刷された本が4例(1564年-1625年)であるが、Douaiはすでに見たようにむしろベルギーとみなしてよさそうである。ただし、Lyonsの独立性の高かった時期に印刷された本では、他のやり方も同様に見られるとはいえ、ページ・キャ

¹⁴ Cf. McKerrow, *Introduction*, pp. 83-84.

¹⁵ イギリスの慣行についてはすでにMoxonが明快に述べている (*Mechanick exercises*, p. 210)。

¹⁶ Barberが指摘するように ('Catchwords', pp. 303-4), 18世紀のRouenの印刷者たちはイギリスの慣行を真似して意図的にページ・キャッチワードを用いていた。

ッチワードが半数以上を占めている（1532年-1676年）。

ベルギーで印刷された本のうち、Antwerp（1525年-1788年）で印刷された本にはほぼ例外なくこの特徴的流儀が現れている。例に漏れず、Antwerpで印刷された本はオランダのパターンに類似しているわけで、実際にオランダで印刷された本からヒントを得ているのかもしれない。Louvain（1549年-1705年）とGhent（1617年、1625年）でも、同様のやり方が見られる。また、Luxemburgで印刷された本にも、1例（1702年）が見られた。BrusselsとLiegeで印刷された本はそこまではっきりとこのやり方に傾いているわけではないが、Brussels（1658年-1731年）とLiège（1667年、1698年）でこの特徴的流儀が見られた。

スイスでは、Basle（1521年-1679年）で印刷された本でたいへんよく用いられているが、このやり方だけが用いられているというわけではないし、Zurich（1556年-1670年）で印刷された本でも見つかる。他方、Genevaで印刷された本では少なく、突発的な例が1540年から1753年までに見つかるにすぎない。Lausanneで印刷された本では1691年から1765年まで時折見受けられるが、Neuchâtelで印刷された本では1例のみ（1744年）であった。

McKerrowが指摘しているように¹⁷、オランダで印刷された本には、片方を本文に、もう片方を註にというように、一つのページに二つのキャッチワードを印刷するという特徴的な習慣がある。これもまた、駄目を押そうというオランダ流の好みの一例と言える。オランダの例は1649年（Amsterdam）から1779年（Leiden）まで見つかった。ただし、他でも用いられないわけではない。とりわけドイツで印刷された本ではよく見かけられる（Leipzig 1674年-Gera 1798年）。当然ながらAntwerpで印刷された本（1634年、1668年）に見つかり、イタリアで18世紀に印刷された本にも3例（Padua 1722年、Arezzo 1756年、Venice 1765年）、イングランドで印刷された本にも時折見つかる（London 1710年-94年、Cambridge 1739年）。スウェーデンで印刷された本にも1例（Stockholm 1697年）ある。Parisで1743年に印刷された本に1例あるが、非常に妙なつくりの本である¹⁸。1ページに含まれる本文、訳、註にあわせて3つのキャッチワードがついている事例も1例あった（Leipzig 1780年）¹⁹。

印刷地の特定にとって、ページ・キャッチワードの使用の有無は、主に反証の意味しかもない。それが使われていれば、どの時代であってもParisで印刷された本ではないし、1680年以降であればフランス全域で印刷された本ではないという強力な論拠になる。

（ii）折記号のあるページを除くすべてのページにキャッチワードを記すやり方

このやり方は主に16世紀の特徴的流儀であり、大部分は、Lyons（1553年-1669年）で印刷された本に見いだされる。他ではフランスの例が数例（Rouen 1607年、Niort 1616年、Tournon 1616年、Avignon 1623年）あるが、Parisで印刷された例は見つからなかった²⁰。Basleで印刷された本にもたまに見られることがあり（1530年-1645年）、Genevaで印刷された本にも2例（1563年、1701年）が見られた。後者は、またしても、Genevaの印刷業が復古

¹⁷ *Introduction*, p. 84.

¹⁸ 前掲 43 頁註 9。

¹⁹ Theocritus, *Reliquiae*, Lipsiae, Weidmann et Reich, 1780 年 (W.: DD.8.41).

²⁰ McKerrow (*Introduction*, p. 84) は Paris で印刷された 2 冊の本（1556 年、1557 年）を引いているが、いずれも G. Rouillius [訳註：Rouillé, Guillaume, 1518-1589. Lyons の印刷業者] の本である。ということは、Lyons で印刷されたわけではないとしても、Lyons のやり方の影響を受けているということになる。

趣味的であるという例をなしている。他は、オランダで印刷された本に1例 (Franecker 1599年)、ベルギーで印刷された本に1例 (Antwerp ? 1582年) があり、ドイツで印刷された本に5例 (Frankfurt 1543年, Strasbourg 1570年, 1617年, Cologne 1600年, 1609年) を数えるのみである。

(iii) 紙葉キャッチワード

前述のように、この特徴的流儀が用いられるのは、主に16世紀および17世紀前期に限られる。調査対象中で最初に使用された例はVenice (1516年) であるが、それ以降にイタリアで印刷された本で見かけることは少ない (Bologna 1523年, Florence 1550年, 1552年, Venice 1561年, 1563年, 1565年)。フランスで印刷された本は、Lyonsで1518年から1600年まで印刷された本およびParisで1546年から1651年まで印刷された本に見つかっている。ただし、1610年以降は断然少ない。もしかすると重要ではないかもしれないが特筆しておくとするば、最も遅い時期のParisの2つの例 (1644年, 1651年) は、いずれもSir Kenelm Digbyが執筆した本であり、そのうちひとつは英語本である²¹。フランスで印刷された本の例は他に、La Rochell (1578年), Rouen (1583年), Orleans (1604年, 1620年), Maillé (1616年, 1619年) がある。オランダで印刷された本でこの特徴的流儀が採用される例は、たいへん少ない。Franecker (1586年, 1594年), Leiden (1662年, 1609年), Amsterdam (1626年) が見つかった。ドイツでは、Frankfurt (1549年-1625年) で印刷された本でひろく使われており、Hanauで印刷された本で限られた時期 (1602年-19年) に見つかる。またTübingen (1533年2点), Speyer (1581年), Strasbourg (1595年), Cologne (1603年), Herborn (1586年, 1613年), さらに下ってLeipzig (1655年, 1691年) の例が見つかっている。イングランドの事例は、16世紀後期に少数ある (London 1579年-1600年)。

しかし、最も頻繁に用いられているのは、スイスで印刷された本である。この特徴的流儀は、Basle (1534年-84年) とZurich (1558年-92年) で時々用いられている。Genevaで印刷された本では、1546年から1683年におよぶ時期に最もひろく用いられるやり方になっている。Leipzigで遅い時期に用いられている例を除けば、1625年頃以降に印刷された本で紙葉キャッチワードが採用されていれば、Genevaで印刷された本と推測できよう。

(iv) 折丁キャッチワード

折丁キャッチワードはイタリア発祥のものだが²²、ここで検討している時期では、前述のように、基本的にParisで印刷された本に見られる。Parisで印刷された本の例は1551年から1799年まで印刷された本に見つかっており、この特徴的流儀を用いるのが圧倒的多数になっている。また、フランスの地方都市で印刷された本でも、他の点ではつねにParisのやり方に従っていない都市についても、通常のやり方になっている。フランスの地方都市で印刷された例は、1560年 (Poitiers), 1587年 (Bordeaux), 1594年 (La Rochelle) にはじまって、1788年 (Sedan) までの刊本に見つかっている。大いなる例外はもちろんLyonsで印刷された本であり、1585年に孤立した例 (キャッチワードの配置に規則性が見られないもの) があるほか

²¹ *Two treatises*, Paris, G. Blaizot, 1644 (Wing D1448) ; *Demonstratio immortalitatis animæ*, Paris, I. Villery et G. Iosse, 1651年 (W.: P.n.1).

²² Haebler, *Handbuch*, p. 60 ; E. G. Duff, *Early printed books*, London, 1893, p. 72.

は、折丁キャッチワードは1678年から1780年までに印刷された本にしか見られない。ページ・キャッチワードが用いられている最後の例は1676年に印刷された本だから、いつ変化したか、ほぼ正確にわかる。

スイスで18世紀以前に印刷された本でこの特徴的流儀が採用されている例は少ない(Geneva 1601年, 1621年, Basle 1675年)。18世紀後半には、よく用いられるようになっていく(Lausanne 1747年-96年, Geneva 1758年-82年, Neuchâtel 1777年-87年, Basle 1797年)。ベルギーでは、Antwerpで印刷された本に3例(1540年, 1656年, 1700年)見つかるが、他は18世紀に印刷された本に限られている(Brussels 1702年2点, 1788年, Bouillon 1770年, Liege 1777年, 1787年)。

他の国で印刷された本では、もっとわかりづらいが同様の基本的パターンを識別することはできる。イタリアで印刷された本では、ページ・キャッチワードが最終的に用いられるようになる以前、16世紀に印刷された本で、この折丁キャッチワードという特徴的流儀が使われているものがある(Venice 1543年-78年。ただし、ページ・キャッチワードと折丁キャッチワードが混ぜて使われている例が1584年に印刷された本に1例ある。Florence 1548年, 1550年, Rome 1551年, Bologna 1551年)。さらに、18世紀後期になって再び用いられた例がある(Turin 1761年, Vicenza 1791年)。この他に、Veniceで1729年に印刷された本に2例あるが、そのうち1例はフランスで印刷された本の特徴を示す際にすでに述べておいた²³。

ドイツで印刷された本では1750年以前の本ではわずかに数例を数えるにすぎない(Frankfurt 1620年, Cologne 1640年, Leipzig 1696年, 1705年)。1750年以降は比較的によく見られるようになる(Leipzig 1756年), Berlin 1756年-88年, Strasbourg 1762年, 1775年, Karlsruhe 1769年, Dresden 1771年, Zweibrücken 1776年, Breslau 1789年, Hamburg 1798年)。

オランダで印刷された本のやり方は、当然ながら、さらにわかりにくい。1750年以前の本にいくつかの例が見受けられるが、その中には本当にオランダで印刷されたか疑わしいと考えべきものが含まれる(Leiden 1645年, Amsterdam 1681年-1724年, Rotterdam 1694年, The Hague 1714年-49年, Maastricht 1731年)。1750年以降に印刷された本では、またとりわけAmsterdamで印刷され出版事項にMarc-Michel Reyの名前の記されている1762年以降の本では、この慣行がもっと広まっており、Amsterdam (1751年-85年), Dordrecht (1769年), The Hague (1776年), Maastricht (1779年), Leiden (1779年(2冊), 1784年)の例が見つかっている。スペインで印刷された本でこのやり方をとった本は見つからなかった。ブリテンで印刷された本でも2例のみである(London 1740年, Glasgow 1754年²⁴)。

したがって、折丁キャッチワードが使われていればParisまたはParisの影響を受けた地域で印刷された本だという強い推定が当てはまる時期は、1570年頃(1680年頃以降のLyonを含む)から1760年頃と考えてよさそうである。1760年以降になると、一般的趨勢として簡略化へむかうので、この推定は急速にあてはまらなくなり、1790年代までにほぼ妥当しなくなる。

(v) キャッチワードの省略

図版(とくに建築や地理学の著作で)や数学的な図表が載っている本では、どの時期に印刷

²³ 前号14頁註6を参照。もう1例はG. Pachymeres, *Michael Palæologus*, Venetiis, B. Javarina, 1729 (W.: M.6.13)である。

²⁴ Fontenelle, *Dialogues of the dead*, Glasgow, R. Urie, 1754. (Wolf: Lm 1478).

されていてもキャッチワードが付されていないものがあるが、その理由は明白である。そうした事例はとりたてて重要ではないので、ここでは論じない。それら以外では、Parisで16世紀に印刷された本（1512年-57年）でこの慣行がよく見られる。McKerrowが観察しているように、とりわけEstienne一族によって印刷された本に多い²⁵。Poitiers（1550年）、Rouen（Janotによって印刷された本 1551年）、Paris（1619年）、Caen（1562年）、Bordeaux（1574年）にも例が見つかっている。フランス外では、Antwerp（1538年）、Barcelona（1543年）、Geneva（1553年、1560年）で印刷された本で、キャッチワードが省略されているのが見つかっている。

この特徴的流儀は、18世紀に印刷された本にふたたび現れる。趨勢が簡略化に向かい、19世紀の慣行を先取りするものである。調査対象中では、1748年にGlasgowでFoulis Pressによって印刷された本の例がある。このことは、Foulis一族がキャッチワードを落とす最初の現代的印刷者だったというPhilip Gaskell氏の見解を裏づけるものである²⁶。それ以降では、Foulisで印刷された本がもう1例（1763年）あり、またAberdeen（1776年）、Dublin（1792年）、London（1799年）の例が1例ずつある。

ヨーロッパの最古の例は、Parisで印刷されたものである。すなわち、Fournierの*Manuel typographique*の各巻（1764年、1766年）である。遅れて、1769年、1798年、1799年にもParisで用いられている例がある。ドイツで印刷された本でキャッチワードが省略されている本が、Leipzig（1783年、1796年）、Meissen（1788年）に見つかっている。また、イタリアで印刷された本でも、Sassari（1774年）、Bologna（1787年）、Parma（1795年）の例がある。

したがって、16世紀に印刷された本でキャッチワードが省略されていれば、Parisで印刷された本、とりわけEstienne一族（もしかするとGenevaの工房で印刷されている場合を含む）によって印刷された本と考えてよい。18世紀に印刷された本では、特定の地域に限られる慣行というよりも、すでにあちこちで述べたように、後年の展開を先取りするものといえる。

(v) すべての紙葉の表ページにキャッチワードを記すやり方

Douai（1629年）の例がある。

（翻訳ここまで）

二 Sayceの諸説の検討

(1) 本文折記号に用いられる数字

すでに説明したことの繰り返しになるが、西洋の書籍は、全紙と呼ばれる1枚の大きな紙を幾重にも折り畳んでできるひとつの折丁をいくつも束ねた集合体である。束ねる順序を示すた

²⁵ *Introduction*, p. 84. ただし、後年のフランスの慣習についての彼の説明（p. 83）は大いに誤解を招く〔訳註：「フランスで16世紀に印刷された本ではキャッチワードが記載されていないものが多く、17世紀にはかなり頻繁に使われていたようであるものの、イングランドで廃れるよりも早く使われなくなった」という部分と思われる〕。

²⁶ ‘The Early Work of the Foulis Press and the Wilson Foundry,’ *The Library*, V, vii (1952), 91-93; *A bibliography the Foulis Press*, London, 1964, p. 49. Gaskell氏はこの新機軸がなされたのは1747年だとしている。1年の開きは、調査対象を思えば一般にありがちなことであると考えたくなるのだが、性急に過ぎるかもしれない。

め、それぞれの折丁にしばしばアルファベットが記される。さらに折丁内の各紙葉の順序を明らかにするために、しばしば番号付けがされる。このアルファベットと数字から構成されるのが、折記号である。

Sayceの結論を要約すれば、折記号がアルファベットと数字から構成されている場合、ローマ数字が使われるのは主としてParisの流儀であり、他のほとんどの地域では一般にはアラビア数字が使われる、ということになろう。この点センター所蔵資料にもとづく調査でも大筋は首肯できるが、個々の論点については異なる結果が出たものもある。

センター所蔵資料で調査した中で、Parisを印刷地として表示している資料は545点（1552年-1800年）あり、そのうち本文折記号を構成する数字がローマ数字で表記されているものは242点（44%、1568年-1794年）、アラビア数字（算用数字）で表記されているものは261点（48%、1552年-1800年）、1冊の中で両者が混合されているものは4点、折記号がアルファベットと数字から構成されていないもの（大半は折丁ごとに番号「1」「2」…が記されているもの）が38点あった。

ただし、1766年までに刊行された資料に限れば、148点中ローマ数字表記が130点（88%）、アラビア数字表記が13点（9%）、混合が3点、表記されていないものが2点であった。1767年から1779年までに刊行された本79点では、ローマ数字表記が66点（84%）、アラビア数字表記が13点（16%）であった。1780年から1800年に刊行された資料318点では、ローマ数字表記が46点（14%）、アラビア数字表記が235点（74%）、混合が1点、表記されていないものが36点（11%）であった。したがって、Sayceの言うように、18世紀末になってアラビア数字表記への転換が起こったと結論できる。しかし、ローマ数字表記もけって見られなくなったわけではないし、反対に、アラビア数字表記がかつてまったく見られなかったということもない。

Sayceにならって、フランスの他の都市の印刷物と比較しておこう。センター所蔵資料で調査したうち、Lyonsで印刷されたと表示されている資料は11点（1556年-1788年）にすぎないが、そのうち、ローマ数字表記のもの1点、アラビア数字表記のもの8点、折記号に数字が現れてこないもの2点であった。Lyonsで出版されたと表示されたものまで含めると58点（1539年-1789年）あり、そのうちローマ数字表記が18点（31%、1539年-1788年）、アラビア数字表記が37点（64%、1556年-1789年）、混合が1点、折記号に数字が現れてこないもの2点であった。16・17世紀の刊行物だけに限ると、40点中でローマ数字表記が10点（25%）、アラビア数字表記が30点（75%）である。アラビア数字表記の比率がたしかに高いように見える。

ParisおよびLyons以外のフランスの諸都市で印刷ないし出版されたと表示されている資料については、SayceはParisに追随している地域とLyonsに追随している地域、そして両者の混合の3種に分けているのであるから、それぞれの都市ごとに分類しなければ意味をなさないであろう。十分に数多くの例を調べたわけではないが、いくつかの都市については顕著な傾向が見いだされた。たとえば、Rouenで印刷ないし出版されたと表示されている資料21点中、1584年から1720年に刊行された13点はすべてローマ数字表記であり、それ以降に刊行された8点はローマ数字表記の1点（1790年）を除いてすべてアラビア数字表記になっていた。その一方で、Avignonで印刷ないし出版されたと表示されている資料19点中、ローマ数字表記は8点（1751年-1767年）、アラビア数字表記は11点（1759年-1789年）であり、センター所蔵資料をもとにした調査の結果では、Sayceの主張とは異なり、同時期に並行して使われていたことになる。都市間の影響関係についてはさらなる検討が必要であろう。

他の国との比較はどうだろうか。ベルギーで印刷ないし出版されたと表示されている資料 131 点中、ローマ数字表記は 58 点 (44%, 1585 年-1787 年), アラビア数字表記は 63 点 (48%, 1560 年-1795 年), 混合は 10 点 (8%, 1578 年-1633 年) であった。しかし, 都市によってばらつきが大きく, Antwerp で印刷ないし出版された資料 32 点は, ローマ数字表記が 4 点 (1611 年-1618 年), アラビア数字表記が 20 点 (1560 年-1719 年), 混合が 8 点 (1578 年-1633 年) であった。Bruxelles で印刷ないし出版された資料 30 点は, ローマ数字表記が 6 点 (1595 年-1787 年), アラビア数字表記が 22 点 (1604 年-1795 年), 混合が 2 点 (1610 年, 1624 年) であった。これにたいして, Ghent で印刷ないし出版された資料 39 点は, ローマ数字表記が 37 点 (1586 年-1632 年), アラビア数字表記が 2 点 (1694 年, 1725 年) であった。Sayce の主張と大幅に異なるが, いずれにせよ調査点数が少ないので, なんらの結論を出すことはできない。

それ以外の諸国についてはアラビア数字表記が圧倒的に優勢である。

スイスで印刷ないし出版されたと表示されている資料 219 点中, ローマ数字表記は 38 点 (17%, 1557 年-1788 年), アラビア数字表記は 166 点 (76%, 1530 年-1799 年), 混合は 3 点 (1%, 1596 年-1788 年), 折記号がアルファベットと数字から構成されていないもの 12 点 (5%, 1770 年-1799 年) であった。

イタリアで印刷ないし出版されたと表示されている資料 286 点中, ローマ数字表記は 22 点 (8%, 1517 年-1753 年), アラビア数字表記は 255 点 (89%, 1517 年-1799 年), 混合は 1 点 (1681 年), 折記号がアルファベットと数字から構成されていないもの 8 点 (3%, 1750 年-1787 年) であった。

オランダで印刷ないし出版されたと表示されている資料 590 点中, ローマ数字表記は 101 点 (17%, 1574 年-1789 年), アラビア数字表記は 481 点 (82%, 1537 年-1799 年), 混合は 6 点 (1%, 1630 年-1783 年), 折記号がアルファベットと数字から構成されていないもの 2 点 (0%, 1775 年と刊行年不詳だが 18 世紀の刊行物) であった。

ドイツで印刷ないし出版されたと表示されている資料 1,815 点中, ローマ数字表記は 56 点 (3%, 1508 年-1788 年), アラビア数字表記は 1,710 点 (94%, 1528 年-1800 年), 混合は 20 点 (1%, 1615 年-1770 年), 折記号がアルファベットと数字から構成されていないもの 29 点 (2%, 1678 年-1800 年) であった。

イングランド, スコットランドおよびアイルランドで印刷ないし出版されたと表示されている資料 2,008 点中, ローマ数字表記は 79 点 (4%, 1575 年-1788 年), アラビア数字表記は 1,817 点 (90%, 1544 年-1800 年), 混合は 7 点 (0%, 1758 年-1788 年), 折記号がアルファベットと数字から構成されていないもの 105 点 (5%, 1657 年-1800 年) であった。なおローマ数字表記になっている 79 点には, いずれも London で印刷ないし出版されたと表記されているが, そのうち 74 点は 18 世紀に刊行されたフランス語書であり, 前回も述べたように, 検閲逃れのために出版地を偽った書籍が多く含まれていることが想像される。

Sayce が示唆している論点のひとつに, ローマ数字表記とアラビア数字表記の同一書における混在が, たんなる誤りではなく, ひとつのやり方であったということがある。この点について掘り下げる余裕がないが, センター所蔵資料にもとづく調査でも, 両者の表記が混在している例が一定程度見られている。興味深い論点と言える。

(2) ローマ数字で2を表すときijと記すやり方

センター所蔵資料を調査した中で、本文折記号を構成する数字がローマ数字で表記されているものは1,164点(1508年-1798年)あったが、そのうち2がローマ数字でijと表記されていたものは1,146点(98%)であった。iiと表記されていたのは18点にすぎず、すべて16世紀に刊行されていた(1508年-1577年)。内訳は、Augsburgで印刷された本1点(1508年)、Veniceで印刷ないし出版された本8点(1517年-1544年)、Parisで印刷ないし出版された本4点(1524年-1574年)、Lyonsで印刷された本1点(1536年)、Bresciaで出版された本1点(1560年)、Londonで印刷された本1点(1577年)、残る2点(1530年、1577年)は印刷地・出発地ともに不明である²⁷。

したがって、Sayceの言うように、折記号を構成する数字をローマ数字で表記するとき2をiiと記すのはかなり古い時期の刊本だと結論づけられる。ただし、誤解ないように付け加えれば、ijと記された例も1516年から現れているから、16世紀にはiiという表記のみが使われていたという意味ではない。また、Sayceの観察した例以外にもVeniceの本が1537年から1544年まで4点が見つかっている一方で、Genevaの例は註27に掲げたものを除けば見つけれなかった。

(3) ローマ数字で4を表すときiiijと記すやり方

センター所蔵資料を調査した中で、本文折記号を構成する数字4がローマ数字で表記されていたものは809点あったが、そのうちiiijと表記されていたのは307点(38%, 1516年-1788年)、ivと表記されていたのは502点(62%, 1574年-1798年)であった。Parisで印刷ないし出版されたと表示されている資料でも、ivという表記が1662年から見付き、全体としては比率に特段の差は見られなかった。

ただし、上述のように、ivという表記が最初に現れる資料は1574年の刊行物(Amsterdam刊)であり、しかも1750年までに刊行された資料274点に限定すれば、iiijと表記されていたのは248点(91%)、ivと表記されていたのは26点(9%)であった。1751年以降の資料536点では、iiijと表記されていたのは59点(11%)、ivと表記されていたのは477点(89%)であった。1750年以降に転換があったことがわかる。

(4) 第1紙葉に番号をつけるやり方

折丁の第1ページには、通常ならば、アルファベットを記すだけで番号づけは省略される。記さなくても明白だからであろう。第1紙葉に番号づけをした例があるか、センター資料では網羅的な調査ができなかったが、16世紀後半の刊本にいくつか見つけた。Peter Martyr, *The history of traualle in the VVest and East Indies, and other countreys lying eyther way, towardes the fruitfull and ryche Moluccaes, as Moscouia, Persia, Arabia, Syria, Ægypte, Ethiopia, Guinea, China in Cathayo and Giapan*, London, Richarde Iugge, 1577では、Ai, Aii, Aiii, Aiiiiというようになっていた。また、Guillaume Terrien, *Commentaires du droict ciuil tant public que priué, obserué au pays & duché de Normandie*, Paris, Iaqués du Puys, 1574では、a.i., a.ii., a.iii.,

²⁷ そのうち1点はJean Bodinの*Les six livres de la republique*, 1577であるが、GenevaのClaude Jugeの手になると推定されている。Cf. Roland Crahay et al., *Bibliographie critique des éditions anciennes de Jean Bodin*, Académie royale de Belgique, 1992, p. 99.

a.iii. というようになっており、Sayce が述べているピリオドを打つやり方の例になっている。同様に、Francois Grimaudet, *Paraphrase du droict des dixmes ecclesiastiques & infeodées*, A Paris, Pour Iean Borel, 1571 は、大文字アルファベットを使って、A.j., A.ij., A.iii., A.iiij. というようになっている。Hugh Latimer, *Frutefull sermons*, London, Iohn Day, [1575] および Hubert Languet, *De la puissance legitime du prince sur le peuple, et du peuple sur le prince*, S.l.s.n., 1581 も同様である。

(5) 何葉目まで折記号を記すか

折丁内の紙葉数は判型に応じて変わるが、いずれにせよ折丁とは畳んだ紙葉を束ねたものだから、折丁の前半の紙葉について順番が確定されれば、残りの紙葉の順番も自動的に決まる。したがって、前半にだけ折記号を記すのが一見すると最も合理的であるということになる。しかしながら、時代や地域の差に応じてそれとは異なる慣行があったというのが、Sayce の主張の骨子である。

手漉き紙の場合、判型の判定は、chain line (紙漉きに用いられる網に用いられた金属製の鎖の跡) の方向、透かしの現れる位置、折丁ごとの紙葉数、おおまかな寸法 (ただし再製本などにより大幅に化粧裁ちされていない場合に限る) などを手がかりにおこなわれるが、いずれにせよ熟練を要する²⁸。今回センターでおこなった調査は大学院生を中心とする研究協力者たちが中心になったものだが、率直に言えば、私自身の理解が不十分であったこともあって事前の指導が十分でなく、この報告にあたって再調査をおこなったところ、多くの誤りが見つかった。誤りはある程度まで実物の再調査にもとづいて修正したが、各種のデータをもとに推定したものもある。

まず、使用される判型の歴史的な変化について述べておく。時代の相違による判型の違いについて、センター所蔵資料の調査をもとに作成した右の表を見ると、16 世紀を通じて 8 折版がほぼ半数を占めていたが、17 世紀前半には 4 折版が増加し、その後で再び小型化が進んで 8 折判、12 折判などが広く用いられるようになることがわかる (表の「ほか」とは 12 折判よりも小さな判型を指している)。雪嶋宏一氏は、D. T. Pottinger, *The French Book Trade in the Ancien Régime*,

年代による判型の変化

年代	総数	2 折判	4 折判	8 折判	12 折判	ほか
1501～1550	39	10 (26%)	14 (36%)	15 (38%)	0 (0%)	0 (0%)
1551～1600	231	41 (18%)	69 (30%)	106 (46%)	9 (4%)	6 (3%)
1601～1650	531	49 (9%)	282 (53%)	84 (16%)	61 (11%)	55 (10%)
1651～1700	742	118 (16%)	267 (36%)	178 (24%)	173 (23%)	6 (1%)
1701～1750	1,227	142 (12%)	372 (36%)	516 (48%)	197 (18%)	0 (0%)
1751～1800	4,281	90 (2%)	569 (13%)	2,964 (69%)	629 (15%)	29 (1%)

フランスで印刷または出版されたと表示されている本

年代	総数	2 折判	4 折判	8 折判	12 折判	ほか
1601～1650	52	3 (6%)	23 (44%)	20 (38%)	6 (12%)	0 (0%)
1651～1700	123	14 (11%)	41 (33%)	16 (13%)	52 (42%)	0 (0%)
1701～1750	164	27 (16%)	28 (17%)	30 (18%)	79 (48%)	0 (0%)
1751～1800	986	25 (3%)	146 (15%)	580 (59%)	226 (23%)	9 (1%)

²⁸ 詳細については、Philip Gaskell, *A New Introduction to Bibliography*, Clarendon Press, 1972, pp. 84-87 および pp. 88-105 の略図を参照。

1500-1791, 1958, p. 40 に掲載されている 16-18 世紀のフランス印刷物の判型の比率の変化の表をもとに、フランスにおいて 16 世紀には全体の半数以上が 8 折判だったが、17 世紀には 4 折判、8 折判、12 折判が拮抗し、18 世紀になると 12 折判が半数以上を占めるようになると指摘している²⁹。センター所蔵資料をもとにした調査について、フランスで印刷ないし出版されたと表示されている資料についてのみまとめると、前ページ右下の表のようになる。12 折判の増加は 17 世紀後半から 18 世紀前半の事象であるといえそうであり、またどの地域にもあてはまるとは言え、とりわけフランスの印刷物に顕著な特徴であるといえそうである。

社会科学古典資料センターは社会科学系の専門書を主要な蒐集対象にしているから、大判で作製される豪華本や、小型の判型の民衆本は比較的少ない傾向にあると想像される。そのことと、前述したような調査手法そのものの限界とを考慮に入れるとしても、センター所蔵資料の調査にもとづく結果が上記の雪嶋氏の観察とおおむね一致していることから、一定水準の正確さは確保できていると言えるであろう。以上を確認したうえで、折丁の何葉目まで折記号が記されるという Sayce が論じている問題を検討したい。

ただし、Sayce が指摘しているように、同じ 4 折判でも 8 葉からなる本もあれば、8 折判でも 4 葉からなる本もある。センターでの調査では、4 折判の場合、4 葉が一般的だが、2 葉のときもあれば、8 葉のときもあった。4 折判 8 葉の本はイタリアで印刷ないし出版されたと表示されている 4 折判 121 点中 44 点 (36%) を占め、際だった特徴を示している。17 世紀にとりわけ多いが、18 世紀にも用いられている。他の地域では、ドイツおよびオーストリアで印刷ないし出版されたと表示されている 4 折判 458 点中 1 点 (0%) のみしか見つからなかったのをはじめとして、1 割に満たなかった。例外は Geneva で印刷ないし出版されたと表示されている 4 折判であり、11 点しか調査できなかったものの、そのうち 4 点 (36%) が 8 葉から構成されていた。

8 折判の場合は 8 葉が最も多いが、4 葉のときもあり、薄型のパンフレットなど一つの折丁から構成されていてページ数が定まっている場合には 12 葉などになっている場合もあった。18 世紀後半に刊行された本で、ごく例外的に、16 葉でひとつの折丁にしていた本があった。8 折判 4 葉の本は、イギリスで印刷ないし出版されたと表示されている 8 折判 1,193 点中 442 点 (37%) を占めている。ほとんどは 18 世紀の刊行物である。ついで割合が多かったのはオランダで印刷ないし出版されたと表示されている 8 折判であり、231 点中 36 点 (16%) を占めていた。すべて 18 世紀後半の刊行物である。他はもっと少なく、イタリア、ドイツ・オーストリア、スイスで印刷ないし出版されたと表示されている 8 折判では、ほとんど見られなかった。ただし、Paris で印刷ないし出版されたと表示されている 8 折判では、全体としては 595 点中 52 点 (9%) を占めるのみだが、16 世紀後半に限ると 29 点中 10 点 (34%)、17 世紀前半では 17 点中 8 点 (47%) を占めていた。注目すべきと言える。

12 折判の場合は組付の仕方によって、6 葉からなるやり方、8 葉からなるやり方、12 葉からなるやり方、8 葉からなる折丁と 4 葉からなる折丁が交互に現れるやり方、4 葉からなる折丁と 2 葉からなる折丁が交互に現れるやり方の 5 種類があった。このうち、8 葉と 4 葉からなる 12 折判は、Paris で印刷ないし出版されたと表示されている 12 折判 289 点中 80 点 (28%) を占めていた。17 世紀後半から 18 世紀に至るまで、12 折判全体のほぼ 3 割から 4 割で用いられている。他の地域でも 18 世紀から使用例が見られ、フランスの地方都市では 61 点中 12 点

²⁹ 雪嶋宏一『西洋古版本の手ほどき 基礎編』明治大学リバティアカデミー、2011 年、26 頁を参照。

(20%)、他の地域でも 12 折判全体の 1 割程度が用いられていた。ただし、オランダやイギリスで印刷ないし出版されたと表示されている本では、以前にも述べたように印刷地を偽装したものが含まれていると考えられるので、検討の余地がある。ベルギーで印刷ないし出版されたと表示されている 12 折判 14 点中 7 点 (50%) が 8 葉と 4 葉からなっていたが、すべて 18 世紀後半の刊行物であり、Paris の慣行との関係を精査すべきであろう。

以下では、Sayce にならって、判型にかかわらず、折丁を構成する紙葉数ごとにまとめることにする。ただし、2 折判は除外し、4 折判以下の判型で、折丁の構成紙葉数が 4 葉、8 葉、12 葉の 3 種類を調査した。

以下の表は、Paris で印刷ないし出版されたと表示されている本について、16・17 世紀については 100 年ごとに、18 世紀については 50 年ごとに、折丁の何葉目まで折記号が記されているかを示したものである。A 欄は折丁を構成する紙葉数を表しており、B 欄はそれぞれの折丁の何葉目まで折記号が記されているかを表している。記載されている以外の組み合わせは見つからなかった。各項の数字はあてはまる本の点数を、カッコ内の百分率は折丁を構成する紙葉数ごとに割合を示したものである（小数点以下を四捨五入したので、合計が 100% にならない場合がある）。なお、折記号が少しも記されていない本はあらかじめ省いている。

Paris で印刷ないし出版されたと表示されている本

A	4				8					12			
B	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	5	6	7
1501-1600	0	1 (9%)	10 (91%)	0	0	0	0	19 (95%)	1 (5%)	0	1	0	0
1601-1700	1 (2%)	1 (2%)	39 (93%)	1 (2%)	0	0	2 (13%)	14 (88%)	0	0	3 (15%)	14 (70%)	3 (15%)
1701-1750	0	4 (17%)	19 (83%)	0	0	0	2 (10%)	16 (80%)	2 (10%)	0	0	33 100%	0
1751-1800	7 (5%)	121 (87%)	11 (8%)	0	35 (8%)	21 (5%)	5 (1%)	391 (86%)	5 (1%)	1 (1%)	2 (1%)	129 (93%)	6 (4%)

同じことを、Lyons およびフランスの他の都市で印刷ないし出版されたと表示されている本についておこなったのが以下の表である。

Lyons で印刷ないし出版されたと表示されている本

A	4				8					12			
B	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	5	6	7
1501-1600	0	0	1 100%	0	0	0	0	4 (44%)	5 (56%)	0	0	0	0
1601-1700	0	0	5 (63%)	3 (38%)	0	0	0	2 (50%)	2 (50%)	0	5 (84%)	1 (17%)	0
1701-1750	0	0	1 100%	0	0	0	0	3 100%	0	0	0	0	0
1751-1800	1 (33%)	2 (67%)	0	0	0	0	0	2 100%	0	0	0	6 100%	0

フランスの他の都市で印刷ないし出版されたと表示されている本

A	4				8					12			
B	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	5	6	7
1501-1600	1 (25%)	0	3 (75%)	0	0	0	0	0	2 100%	0	0	0	0
1601-1700	0	9 (56%)	5 (31%)	2 (13%)	0	1 (10%)	0	9 (90%)	0	0	1 (20%)	4 (80%)	0
1701-1750	0	7 100%	0	0	0	1 (33%)	0	2 (67%)	0	0	0	13 (93%)	1 (7%)
1751-1800	4 (14%)	24 (83%)	1 (3%)	0	8 (16%)	13 (26%)	2 (4%)	27 (54%)	0	0	2 (10%)	19 (90%)	0

以下同様に、各地域について表を示す。なお、スペインの例は少なすぎてとりあげられなかった。

ベルギーで印刷ないし出版されたと表示されている本

A	4				8					12			
B	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	5	6	7
1501-1600	0	1 (6%)	15 (94%)	0	0	0	0	1 (25%)	3 (75%)	0	0	0	0
1601-1700	0	7 (12%)	53 (88%)	0	0	0	1 (17%)	0	5 (83%)	0	0	2 (67%)	1 (33%)
1701-1750	0	2 100%	0	0	0	0	0	3 (75%)	1 (25%)	0	0	1 100%	0
1751-1800	0	3 100%	0	0	0	0	0	20 100%	0	0	0	2 100%	0

Genevaで印刷ないし出版されたと表示されている本

A	4				8					12			
B	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	5	6	7
1501-1600	0	0	0	0	0	0	0	1 (50%)	1 (50%)	0	0	0	0
1601-1700	0	0	0	0	0	0	0	6 100%	0	0	0	0	0
1701-1750	0	0	2 100%	0	0	0	0	1 (33%)	2 (67%)	0	0	0	0
1751-1800	0	6 100%	0	0	0	0	1 (4%)	23 (92%)	1 (4%)	0	0	7 100%	0

Basleで印刷ないし出版されたと表示されている本

A	4				8					12			
B	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	5	6	7
1501-1600	0	0	1 100%	0	0	0	0	0	8 100%	0	0	0	0
1601-1700	0	0	4 100%	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1701-1750	0	0	2 100%	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1751-1800	0	1 (25%)	3 (75%)	0	1 (3%)	0	0	24 (83%)	4 (14%)	2 100%	0	0	0

スイスの他の都市で印刷ないし出版されたと表示されている本

A	4				8					12			
B	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	5	6	7
1501-1600	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1601-1700	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0
								100%				100%	
1701-1750	0	0	9	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
			100%					100%					
1751-1800	0	1	1	0	6	1	0	37	21	0	0	6	0
		(50%)	(50%)		(9%)	(2%)		(57%)	(32%)			100%	

オランダで印刷ないし出版されたと表示されている本

A	4				8					12			
B	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	5	6	7
1501-1600	0	0	2	0	0	0	0	1	4	0	0	0	0
			100%					(20%)	(80%)				
1601-1700	0	0	17	1	0	0	0	0	84	0	9	27	19
			(94%)	(6%)					100%		(16%)	(49%)	(35%)
1701-1750	0	0	11	0	0	0	1	7	31	0	0	10	28
			100%				(3%)	(18%)	(79%)			(26%)	(74%)
1751-1800	1	11	43	0	0	1	0	73	52	0	1	53	22
	(2%)	(20%)	(78%)			(1%)		(58%)	(41%)		(1%)	(70%)	(29%)

ドイツとオーストリアで印刷ないし出版されたと表示されている本

A	4				8					12			
B	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	5	6	7
1501-1600	0	0	12	0	0	0	0	2	15	0	0	1	1
			100%					(12%)	(88%)			(50%)	(50%)
1601-1700	0	2	138	6	0	0	1	3	61	0	1	13	40
		(1%)	(95%)	(4%)			(2%)	(5%)	(94%)		(2%)	(24%)	(74%)
1701-1750	0	2	189	0	0	0	1	0	108	0	0	1	12
		(1%)	(99%)				(1%)		(99%)			(8%)	(92%)
1751-1800	3	8	102	0	15	170	4	37	715	0	1	6	4
	(3%)	(7%)	(90%)		(2%)	(18%)	(0%)	(4%)	(76%)		(9%)	(55%)	(36%)

イタリアで印刷ないし出版されたと表示されている本

A	4				8					12			
B	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	5	6	7
1501-1600	0	14	3	0	0	0	0	43	1	0	0	3	0
		(82%)	(18%)					(98%)	(2%)			100%	
1601-1700	0	18	3	0	0	0	0	35	0	0	0	6	0
		(86%)	(14%)					100%				100%	
1701-1750	0	3	5	0	0	0	0	8	0	0	0	2	0
		(38%)	(63%)					100%				100%	
1751-1800	1	17	7	0	0	5	0	40	2	0	1	9	1
	(4%)	(68%)	(28%)			(11%)		(85%)	(4%)		(9%)	(82%)	(9%)

イギリスで印刷ないし出版されたと表示されている本

A	4				8					12			
B	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	5	6	7
1501-1600	0	0	4	0	0	0	0	3	5	0	0	0	0
			100%					(38%)	(63%)				
1601-1700	1	95	54	10	0	0	3	105	1	0	34	2	0
	(1%)	(59%)	(34%)	(6%)			(2%)	(96%)	(1%)		(94%)	(6%)	
1701-1750	4	250	5	0	0	2	4	127	3	0	7	6	0
	(2%)	(97%)	(2%)			(1%)	(3%)	(93%)	(2%)		(54%)	(46%)	
1751-1800	30	398	6	0	3	43	10	435	17	0	9	55	7
	(7%)	(92%)	(1%)		(1%)	(8%)	(2%)	(86%)	(3%)		(13%)	(77%)	(10%)

印刷地と出版地が分かれている場合、二重にカウントされている場合がある。また、これ以外の地域で刊行された本や、印刷地も出版地もわからない本は除いている。印刷地を偽っていると推定できる本についても、この統計では不問とし、記載されているままに分類している。

時代が下がるにつれて調査点数が増えているのは、センター蔵書の傾向として、実際の刊行点数の変化以上に18世紀の刊行物が厚めに蒐集されているせいもある。いずれにせよ、16世紀の刊行物は調査点数が少なすぎて、そのみではしっかりした結論を導きだせるわけではないが、割合の変化を観察すれば、全体の趨勢としては、Sayceの言うとおり、時代を下るにつれ折記号の表示が簡略化に向かうと言える。4葉からなる折丁であれば、かつて3葉目まで折記号を記していたのが、2葉目までにとどめるようになる。8葉からなる折丁であれば、4葉目や5葉目まで折記号を記していたのが、1葉目や2葉目までにとどめるやり方が試されるようになる。ただし、その進展の時期は地域によって異なり、4葉からなる折丁について、イギリスで印刷ないし出版されたと表示されている本では18世紀に入る前から2葉まで記すのが優勢になっていたのに対して、Parisやイタリアで印刷ないし出版されたと表示されている本で2葉目まで記すやり方が優勢になるのは18世紀後半になってからにすぎない。また、イタリアでは、16世紀からすでに、2葉目までしか記さないやり方が一般的だったように見える。その他の多くの地域では、1葉目または2葉目までにとどめるやり方が試されている例もあるが、18世紀後半でもまだ限定的である。

8葉からなる折丁については、全体の趨勢とは別に、地域的な傾向がはっきりと現れている。フランス、イタリア、イギリスなどで印刷ないし出版されたと表示されている本では4葉目まで、オランダ、ドイツおよびオーストリアで印刷ないし出版されたと表示されている本では5葉目まで折記号を記すのが一般的だったが、オランダでは18世紀後半から4葉目まで記すやり方への移行がはじまり、ドイツおよびオーストリアではむしろ2葉目まで記すやり方が模索されはじめている。

12葉からなる折丁では、最も一般的なのは6葉目まで記すやり方だが、8葉からなる折丁の場合と同様に、オランダ、ドイツおよびオーストリアで印刷ないし出版されたと表示されている本では18世紀前半まで7葉目まで折記号を記すやり方が広がっており、世紀後半に6葉目まで記すやり方に移行している。反対に、Lyonsやイギリスでは17世紀には5葉目までしか折記号を記さないやり方が広まっていたが、18世紀後半にはむしろ6葉目まで記すやり方が優勢になっている。

(6) キャッチワード

全体としてみれば、センター所蔵資料 7,475 点（1508 年-1800 年）を調査した中で、ページ・キャッチワード（毎ページにキャッチワードが付されている）が使われているのは 4,516 点（1530 年-1800 年、60%）、折記号の記されているページ以外のページにキャッチワードが記されているのは 20 点（1556 年-1687 年、0%）、紙葉キャッチワード（各紙葉の裏面にのみキャッチワードを記す）が使われているのは 67 点（1518 年-1775 年、1%）、折丁キャッチワード（各折丁の最終紙葉の裏面だけにキャッチワードが付されている）が使われているのは 2,242 点（1521 年-1800 年、30%）、キャッチワードが記されていないのは 629 点（1508 年-1800 年、8%）であった。センター蔵書の偏りを考慮に入れても、折記号のあるページを除くすべてのページにキャッチワードを記すやり方が用いられるのはごく例外的であり、後述するように、センター所蔵資料中ではフランス、スイス、ドイツの限られた時期にしか見られなかった。ついで少ないのが紙葉キャッチワードであり、英語圏およびベルギーの本では 1 点も見つからなかった。また、キャッチワードが記されていないケースについては、表や図を主とする本に見られる特徴でもあるが、Sayce が論じているように、フランスの本では主題にかかわらず突出して多く見られ、独自性をなしている。

地域別に検討すると、最もはっきりした傾向を見せたのはベルギーである。

ベルギーで印刷ないし出版されたと表示されている本（1560 年-1795 年）134 点中、16・17 世紀に刊行された 93 点では、キャッチワードが記されていない 1 点を除いてすべてページ・キャッチワードが使われていた。18 世紀に入ってページ・キャッチワードが使われた例は、1718 年および 1725 年に Bruxelles で Eugene Henry Fricx によって出版された本である。キャッチワードが記されていない 2 点を除けば、18 世紀の他のすべての本（37 点、1712 年-1795 年）では、キャッチワードが使われるときにはかならず折丁キャッチワードが使われていた。したがって、18 世紀にページ・キャッチワードから折丁キャッチワードへの転換がなされたと考えてよさそうであり、18 世紀の最初の 30 年間を過渡期と考えるか、Bruxelles（ないし Eugene Henry Fricx）では若干の遅れがあったとみなすか、いずれかであろう³⁰。

英語圏でも、別の仕方ではっきりした傾向が見られる。イングランドで印刷ないし出版されたと表示されている本（1544 年-1800 年）1,858 点中、ページ・キャッチワードが使われた例は 1,604 点（86%）、折丁キャッチワードが使われている例 176 点（9%）、キャッチワードが記されていない例 78 点（4%）であった。同様に、スコットランドで印刷ないし出版されたと表示されている本（1675 年-1798 年）71 点中、54 点（76%）でページ・キャッチワードが使われ、残る 17 点（24%）にはキャッチワードが記されていなかった。アイルランドで印刷ないし出版されたと表示されている本 88 点（1682 年-1800 年）では、84 点（95%）でページ・キャッチワードが使われ、残る 4 点（5%）にはキャッチワードが記されていなかった。

ところで、イングランドで印刷ないし出版されたと表示されている本のうち、折丁キャッチワードが使われている 176 点は、すべてが 18 世紀に出版されたフランス語書なのである。前号でも触れたように、18 世紀にフランスで印刷された書物には検閲逃れのために印刷地を偽って London と記したものがある。折丁キャッチワードが使われている 176 点について Emil Weller による偽りの印刷地を記した本のリストや British Library のオンライン版 English

³⁰ もちろん、Sayce が示唆しているように（本号 49 頁を参照）、一部は実際にはベルギーではなく他国で印刷されたと疑ってみることもできよう。

Short Title Catalogueで検索したところ、ほとんどが偽りの印刷地と疑われていた。根拠が示されていない以上、同様の外形的特徴から判断されたものかもしれないが、いずれにせよ注目すべき特徴と言える。

スイスで出版ないし印刷されたと表示されている本では、もっと細かい分析を必要とする。全体を通じてみれば、1530年から1799年に刊行された223件中、ページ・キャッチワードが使われた例は76点（1530年-1790年、34%）、折記号の記されているページ以外のページにキャッチワードが使われた例が4点（1581年-1657年、2%）、紙葉キャッチワードが使われた例が13点（1568年-1751年、6%）、折丁キャッチワードが使われている例が121点（1578年3点、1752年-1799年、54%）、キャッチワードが記されていない例が9点（1730年-1776年、4%）であった。折丁キャッチワードが使われているのは1578年刊の3巻本³¹を除いていずれも18世紀半ば以降に印刷ないし出版されたと表示されている本である。ベルギーよりもさらに遅れて転換が起こったのは確かであるが、ページ・キャッチワードが使われている本が1790年にも見つかるから、完全な変化とは言えない。折記号の記されているページ以外のページにキャッチワードが使われた4点はいずれもBasleの本であり、Sayceの観察に符合している³²。紙葉キャッチワードが使われた13点のうち3点（1568年-1575年）はBasleの本、10点（1581年-1751年）はGenevaの本であり、この点もSayceの観察と合致している。

本文言語別に見ると、ラテン語書（1530年-1778年）47点中、ページ・キャッチワードが使われている例32点（68%）、折記号が記されているページ以外のページにキャッチワードが使われている例4点（9%）、紙葉キャッチワードが使われている例11点（23%）であった。ドイツ語書（1557年-1790年）21点中では、ページ・キャッチワードが使われている例11点（52%）、折丁キャッチワードが使われている例1点（5%）、キャッチワードが記されていない例9点（43%）であり、やはりページ・キャッチワードが優勢である。しかし、フランス語書（1621年-1799年）128点中では、ページ・キャッチワードが使われている例33点（26%）、紙葉キャッチワードが使われている例1点（1%）、折丁キャッチワードが使われている例94点（73%）であって、折丁キャッチワードが逆転する。英語書（1788年-1799年）23点は、すべて折丁キャッチワードであった。

英語書の大半はBasleのJ. J. Tourneisenの手になるものであるが、この点については前号の観察とは異なり³³、英語圏のやり方（ページ・キャッチワード）を採用していない。

つぎに、イタリアで出版ないし印刷されたと表示されている本を見よう。286点（1517年-1799年）中、ページ・キャッチワードが使われている例が238点（1542年-1799年、83%）、紙葉キャッチワードが使われている例が13点（1518年-1671年、5%）、折丁キャッチワードが使われている例が21点（1521年-1797年、7%）、キャッチワードが記されていない例が14点（1517年-1797年、5%）であった。ページ・キャッチワードが優勢であるものの、それだけに限られないことがわかる。

ただし、1558年までと1559年以降に分けてみると、対照がはっきりする。すなわち、1517年から1558年までにイタリアで印刷ないし出版されたと表示されている24点では、紙葉キャ

³¹ *Platonis opera quæ extant omnia*, 3 v., Excudebat Henr. Stephanus, 1578. 印刷地や出版地は記載されていないが、Henri Estienneは1557年以降Genevaで活動したことが判明している。もっとも、それ以前にはParisで活動していたのだから、Parisの流儀に則ったものとも言えるかもしれない。

³² 本号49頁参照。

³³ 前号、39頁。

ッチワードが5点(21%)、折丁キャッチワードが13点(54%)、ページ・キャッチワードが使われている例は3点(13%)にすぎない³⁴。ほかにキャッチワードが記されていない例が3点(13%)ある。1559年以降の262点では、ページ・キャッチワードが使われている例が235点(90%)、紙葉キャッチワードが使われている例が8点(3%)、折丁キャッチワードが使われている例が8点(3%)、キャッチワードが記されていない例が11点(4%)あった。16世紀の半ば以降に転換があったといえる。

さらに1559年以降で紙葉キャッチワードが使われている8点のうち、2点を除いて、6点はフランスに関係した本(フランス語書3点、主題がフランスに関連した本3点)であり、フランス語書のうち1点は実際にはParisで印刷されたという推測がすでになされている本(作者が匿されているがMorellyの*Naufrage des isles flottantes, ou, Basiliade du célèbre Pilpai, poëme héroïque*, A Messine, Par une Société de libraires, 1753)であった。性急な結論を出すべきではないが、興味深いといえる。

ドイツで出版ないし印刷されたと表示されている本を見ると、調査点数1,819点(1508年-1800年)中、ページ・キャッチワードが使われている例が1,547点(1533年-1800年, 85%)、折記号が記されているページ以外のページにキャッチワードが使われている例7点(1604年-1687年, 0%)、紙葉キャッチワードが使われている例が19点(1527年-1775年, 1%)、折丁キャッチワードが使われている例が168点(1524年-1800年, 9%)、キャッチワードが記されていない例が78点(1508年-1800年, 4%)であった。総じて、ページ・キャッチワードが用いられているといえる³⁵。折丁キャッチワードが用いられているのは4点を除きすべて18世紀の刊行物であった。

なお、折記号が記されているページ以外のページにキャッチワードが使われている例は、Francfurtを出版地に記載している1点を除き³⁶、すべてStrasbourgで印刷ないし出版されたラテン語書である。もちろん、Strasbourgで印刷されていればすべてこのやり方が採用されているというわけではなく、ほかのやり方がされているものもある。

オランダで印刷ないし出版されたと表示されている本では、調査点数590点(1537年-1799年)中、ページ・キャッチワードが使われている例が364点(1537年-1799年, 62%)、紙葉キャッチワードが使われている例が2点(1581年-1614年, 0%)、折丁キャッチワードが使われている例が211点(1649年-1789年, 36%)、キャッチワードが記されていない例が13点(1574年-1774年, 2%)であった。16世紀・17世紀の本では、180点中、ページ・キャッチワード171点(95%)、紙葉キャッチワード2点(1%)、折丁キャッチワード4点(2%)、キャッチワードなし3点(2%)であった。これにたいして、18世紀では410点中、ページ・キャッチワード193点(47%)、折丁キャッチワード207点(50%)、キャッチワードなし10点(2%)であった。したがって、折丁キャッチワードは主に18世紀になってから使われるようになったが、ページ・キャッチワードも依然として使われ続けたといえる。

³⁴ 16世紀に折丁キャッチワードが使われている例は、Sayceが挙げているVeniceの本だけでなく、Florenceの本も含まれる。

³⁵ ドイツで印刷されたと表示されている本だけに絞ると、340点であり、それぞれ301点(89%)、1点(0%)、5点(1%)、24点(7%)、9点(3%)となるが、誤差の範囲であろう。

³⁶ *Abbrégé de politique*, Nouvelle éd., reveüe & augmentée de la moitié, A Francfort, Chez Conrad Blamani, 1687. 作者はDavid Constant de Rebecqueと推定されている。フランス語書であり、A Francfort という表示が印刷地と関連しているかは検討の余地がある。

ここまで何度か指摘してきたように、折丁キャッチワードの使用は、16世紀半ばから18世紀半ばまでフランスで印刷された本（Sayceはもっと慎重に「ParisまたはParisの影響を受けた地域で印刷された本」と書いている）の傾向である。実際、センター所蔵資料の調査では、フランスで出版ないし印刷されたと表示されている本1,503点（1539年-1800年）中、ページ・キャッチワードが使われている例が74点（1571年-1796年、5%）、折記号が記されているページ以外のページにキャッチワードが使われている例5点（1556年-1649年、0%）、紙葉キャッチワードが使われている例が10点（1574年-1690年、1%）、折丁キャッチワードが使われている例が1,172点（1539年-1800年、78%）、キャッチワードが記されていない例が240点（1553年-1800年、16%）であった。

このうち折記号が記されているページ以外のページにキャッチワードが使われている5点にはすべて、16世紀または17世紀にLyonsで出版ないし印刷されたと表示されている。Lyonsで出版ないし印刷されたと表示されている本は58点あるが、16・17世紀の本は40点あり、他はページ・キャッチワード21点、紙葉キャッチワード1点（3%）、折丁キャッチワード13点であった。18世紀になると、ページ・キャッチワードが使われている2点を除き、残りの16点では折丁キャッチワードが使われている。

「ParisまたはParisの影響を受けた地域で印刷された本」というSayceの表現は曖昧ないし高度に専門的な要素を含んでいる（実際、影響を受けているかどうかを判断するには個別の検証がその都度必要になる）が、Parisで出版ないし印刷されたと表示された本に限って言えば、1,238点中、ページ・キャッチワード33点（3%）、紙葉キャッチワード8点（1%）、折丁キャッチワード981点（79%）、キャッチワードなし216点（17%）であり、折丁キャッチワードが圧倒的であるとともに、他の地域の本にくらべてキャッチワードが記されていない本が多いことも指摘できる。

ただし、キャッチワードが記されていない216点の内訳は、16世紀9点、17世紀8点、18世紀199点であり、18世紀の資料が圧倒的に多い。キャッチワードの省略にかんするSayceの主張のうち、(ii)18世紀以降簡略化が進むという主張については首肯できるといえる。(i)16世紀にキャッチワードを記載しない慣行があったという主張についても、16世紀の9点のうち7点（1643年-1648年）はRobert Estienneにより印刷ないし出版されたと表示されている資料であった（ただし、Robert Estienneによって印刷ないし出版された本すべてがキャッチワードを欠いていたわけではない）。支配的であったかはともかく、慣行があったということは指摘できそうである。

(7) 行のどこに折記号を配置するか

折記号とキャッチワードはいずれも、通常なら、本文（場合によっては脚註）より下のdirection line（指示行）と通称される段に配置される。Sayceが述べているのは、通常direction lineの右隅にキャッチワードは配置されるから、それが毎ページに記されているとき、折記号をおなじ場所に記すことはできないので、必然的にそれ以外の配置、具体的には中央に置かれるということである。

センター所蔵資料をもとにした調査において、フランス、ベルギー、スイス、イタリア、オランダ、ドイツ、イングランド、スコットランド、アイルランドのそれぞれで印刷ないし出版されたと表示されている資料について、①折記号が中央に置かれていることと、②毎ページにキャッチワードが記されていることとの相関係数を算出したところ、0.997という非常に高い

数値を示した。同様に、①折記号が右側に置かれていることと、②折丁ごとにキャッチワードが記されていることとの相関係数を算出したところ、0.993であった。したがって、一見して、Sayceの言うような相関関係を見いだせるようである（ただし中央とか右という表現には若干主観的な判断が含まれることをお断りしておく）。

しかしながら、後述するように折丁キャッチワードはフランス（ないしParis）で印刷された本の特徴であり、フランスで印刷ないし出版されたと表示されている資料1,503点中でページ毎にキャッチワードが記されているのは74点しかない。この74点中で折記号が中央に配置されているのは27点（36%）、右に配置されているのは47点（64%）であり、しかも右に配置されている資料のうち22点はLyonsで印刷ないし出版されたと表示されている資料であった。

同様に、イタリアで印刷ないし出版されたと表示されてページ毎にキャッチワードが記されている資料238点についても、折記号が中央に配置されているのが102点（43%）、右に配置されているのが136点（57%）であった。

いずれにせよ、折記号が右側に配置されていると言っても、direction lineの一番右にキャッチワードが記されていることには変わらない。中央よりは右寄りだが、キャッチワードより左側に折記号が配置されている。したがって、たとえdirection line上で折記号がキャッチワードに追い出されたというSayceの説明には疑問の余地がないとしても、折記号を行の中央に配置するか、もっと右に配置してほとんどキャッチワードと並ぶようにするかで地域差が現れているといえる。

実際、ドイツで印刷ないし出版されたと表示されており折丁キャッチワードが用いられている本168点を調査したうち、折記号が中央に配置されているものが78点（46%）、右に配置されているものが90点（54%）あり、ほぼ拮抗していた。したがって、センター蔵書の偏りを考慮に入れるとしても、ドイツには、一般的趨勢に反して、キャッチワードの有無にかかわらず折記号を中央に配置しようとする傾向があると言えそうである。その場合は、折記号の配置をキャッチワードの記し方との相関で考えるべきではなく、Sayceが示唆しているように地域的慣行として検討すべきであろうと結論される。実際、ドイツとおなじく18世紀になってから折丁キャッチワードを用いはじめたイングランドで印刷ないし出版されたと表示されている

印刷地または出版地	調査点数	折記号は中央に配置	ページ・キャッチワード
フランス	1,480	52	74
ベルギー	132	49	92
スイス	219	69	76
イタリア	286	101	238
オランダ	589	347	364
ドイツ	1,815	1,525	1,545
イングランド	1,850	1,633	1,601
スコットランド	70	70	54
アイルランド	88	88	84

印刷地または出版地	調査点数	折記号は右側に配置	折丁キャッチワード
フランス	1,480	1,421	1,173
ベルギー	132	76	37
スイス	219	137	118
イタリア	286	177	21
オランダ	589	230	210
ドイツ	1,815	176	167
イングランド	1,850	208	176
スコットランド	70	0	0
アイルランド	88	0	0

本では、176 点中で折記号を中央に配置しているのは 26 点（15%）にすぎず、残りの 150 点（85%）では direction line の一番右に配置されている。

（一橋大学社会科学古典資料センター専門助手）

enough to destroy the Affirmatives; and thereby the excess of Negatives, standing uncontradicted, are the only voice the Representative hath.

And a Representative of even number, especially when the number is not great, whereby the contradictory voices are oftentimes equal, is therefore oftentimes mute, and incapable of Action. Yet in some cases contradictory voices equal in number, may determine a question; as in condemning, or absolving, equality of votes, even in that they condemn not, do absolve; but not on the contrary condemn, in that they absolve not. For when a Cause is heard; not to condemn, is to absolve: but on the contrary, to say that not absolving, is condemning, is not true. The like it is in a deliberation of executing presently, or deferring till another time: For when the voices are equal, the not decreeing Execution, is a decree of Dilation.

Or if the number be odd, as three, or more, (men, or assemblies;) whereof every one has by a Negative Voice, authority to take away the effect of all the Affirmative Voices of the rest, This number is no Representative; because by the diversity of Opinions, and Interests of men, it becomes oftentimes, and in cases of the greatest consequence, a mute Person, and unapt, as for many things else, so for the government of a Multitude, especially in time of Warre.

Of Authors there be two sorts. The first simply so called; which I have before defined to be him, that owneth the Action of another simply. The second is he, that owneth an Action, or Covenant of another conditionally; that is to say, he undertaketh to do it, if the other do it not, at, or before a certain time. And these Authors conditionall, are generally called *Sureties*, in Latine *Fidejussores*, and *Sponsores*; and particularly for Debt, *Prædes*; and for Appearance before a Judge, or Magistrate, *Vades*.

M

OF

上はホブズ『リヴァイアサン』真正初版(1651年)の一部であるが、最下段中央の「M」が折記号を、「OF」がキャッチワードを表している。

indiceretur bellum, an satis esset S. C. Praeicere Tribuni, ut Quintius Consul de bello ad populum ferret: omnes centurias iussit. Combien que le Senat mesme ne vouloit pas ordinairement denoncer la guerre, sans que le peuple leust ordonné: comme Tite Liue parlant de la seconde guerre Punique, dit:

Latum inde ad populum vellere inherere populo Carthaginiensi bellum indicere: & en autre lieu, Ex S. C. populi iussu bellum Praenestinum indictum: & autre part, Ex auctoritate patrum populus Palaputani bellum fieri iussit: & derechef, Populus bellum fieri Aquini iussit: & contre les Samnites, Patres solenni more indicto decreuerunt, ut de ea re ad populum ferretur: & contre les Herniques, Populus hoc bellum frequens iussit: & contre les Vestins, Bellum ex auctoritate patrum populus adversus Vestinos iussit. En cas pareil nous liſons en la vie de Pyrrhus quand le Senat de Tarente eut esté d'advis qu'on denoncât guer

re aux Rommains, le peuple decerna son mandement: & Tite Liue au xxxi. dit qu'il estoit defendu par les Etoliens qu'il ne fust rien arrellé pour le faict de la paix, ny pour la guerre, nisi in Panetolio, & Pylaeo concilio. C'est pourquoy és royaumes de Polongne, Dannemarch, Suede, où la souveraineté est pretendue par la noblesse, les Rois ne peuvent entreprendre la guerre, s'il n'est arrellé par les estats: si ce n'est vn cas de necessité urgente, suivant l'ordonnance de Casimir le Grand. Vray est qu'en Rome pour le regard de la paix, le Senat bien souvent l'entreprenoit sans en parler au peuple, comme on peut voir és traités faicts entre les Rômaines & Latins: & en la guerre sociale, le Senat passa quasi tous les traités de paix & alliance sans le peuple: & souvent les Capitaines le faisoient sans le consentement du Senat, mesmement si la guerre estoit en pais fort éloigné: comme on void en la seconde guerre Punique, les trois Scipions firent les traités de paix & alliance avec les peuples & Princes d'Espagne & d'Afrique, sans l'advis du Senat: vray est que le Senat, & bien souvent le peuple, autorisoit leurs actions, & ratifioit les traités, apres qu'ils estoient faicts: & s'ils estoient preiudiciables, on ny auoit point desgard: mais en ce cas, les ostages & Capitaines en respondoient aux ennemis comme le Consul Mancin, pour la paix accordée avec les Numantins, que le peuple ne voulut pas ratifier, fut liuré entre les mains des ennemis. C'est ce que disoit vn Senateur de Carthage aux Ambassadeurs Rommains, *Vis enim quod C. Licinius Consul primo nobiscum fœdus iit, quia neque auctoritate patrum, nec populi iussu istum erat, neque vos eo tenetis. Itaque aliud fœdus publico consilio iitum est.* Et le mesme auteur parlant de Manlius gouverneur d'Asie, Gallograci inquit, bellum illatum, non ex Senatus auctoritate, nûm populi iussu: quid quis unquam de sua sententia facere ausus est? En cas semblable le Consul Sp. Posthumius, & son armee, se voyans surpris par les ennemis entre les roches & montagnes de l'Apennin traitterent avec eux: estans sortis desarmés & retournés à Rome avec l'armee, le Senat ne voulut pas ratifier la paix: aussi le Consul Posthumius dist deuant le peuple, *Cum me seu corpori, seu necessaria sponsione abstinxisset, qua tamen, quando iniussu populi facta est, non teneatur pop. Rom. nec quicquam ex ea praterquam corpora nostra debentur Samnitibus, dedimus per fœdatis nudi victoribus,* aussi le Consul ne dist

o pas que

上のボダン『国家論六篇』改訂版（リヨン、1580年）では、direction line上で折記号「o」とキャッチワード「pas que」がほとんど横並びに右隅に配置されている。